

(案)

農薬評価書

フルベンジアミド (第4版)

2012年8月24日

食品安全委員会農薬専門調査会

1	目次	
2		頁
3	○ 審議の経緯.....	4
4	○ 食品安全委員会委員名簿.....	5
5	○ 食品安全委員会農薬専門調査会専門委員名簿.....	6
6	○ 要約.....	9
7		
8	I. 評価対象農薬の概要.....	10
9	1. 用途.....	10
10	2. 有効成分の一般名.....	10
11	3. 化学名.....	10
12	4. 分子式.....	10
13	5. 分子量.....	10
14	6. 構造式.....	10
15	7. 開発の経緯.....	11
16		
17	II. 安全性に係る試験の概要.....	12
18	1. 動物体内運命試験.....	12
19	(1) ラット（単回経口投与）.....	12
20	(2) ラット（反復経口投与）.....	16
21	2. 植物体内運命試験.....	18
22	(1) りんご.....	18
23	(2) キャベツ.....	19
24	(3) トマト.....	19
25	(4) 水稻 [2004 年、GLP] <今回追加された試験>.....	20
26	(5) とうもろこし [2002 年、GLP] <今回追加された試験>.....	21
27	3. 土壌中運命試験.....	22
28	(1) 好氣的土壌中運命試験.....	22
29	(2) 土壌表面光分解試験.....	22
30	(3) 土壌吸脱着試験.....	23
31	4. 水中運命試験.....	23
32	(1) 加水分解試験.....	23
33	(2) 水中光分解試験.....	23
34	5. 土壌残留試験.....	23
35	6. 作物等残留試験.....	24
36	(1) 作物残留試験.....	24
37	(2) 後作物残留試験.....	24
38	(3) 推定摂取量.....	25

1	7. 一般薬理試験	25
2	8. 急性毒性試験	26
3	(1) 急性毒性試験	26
4	(2) 急性神経毒性試験（ラット） [2003 年、GLP] <今回追加された試験>	26
5	9. 眼・皮膚に対する刺激性及び皮膚感作性試験	27
6	10. 亜急性毒性試験	27
7	(1) 90 日間亜急性毒性試験（ラット）	27
8	(2) 90 日間亜急性毒性試験（マウス）	28
9	(3) 90 日間亜急性毒性試験（イヌ）	28
10	11. 慢性毒性試験及び発がん性試験	29
11	(1) 1 年間慢性毒性試験（ラット）	29
12	(2) 1 年間慢性毒性試験（イヌ）	30
13	(3) 2 年間発がん性試験（ラット）	31
14	(4) 18 か月間発がん性試験（マウス）	32
15	12. 生殖発生毒性試験	33
16	(1) 2 世代繁殖試験（ラット）	33
17	(2) 1 世代繁殖試験（ラット） <追加試験>	35
18	(3) 発生毒性試験（ラット）	36
19	(4) 発生毒性試験（ウサギ）	37
20	(5) 発達神経毒性試験（ラット）	37
21	13. 遺伝毒性試験<一部今回追加された試験>	38
22	14. その他の試験	39
23	(1) ラットの甲状腺関連ホルモン濃度及び肝薬物代謝酵素に対する影響	39
24	(2) <i>in vitro</i> におけるヨードサイロニン脱ヨード酵素 type1 に対する影響	39
25	(3) 1 世代繁殖試験における児動物の眼球の病理組織学的検査	39
26	(4) 周産期混餌投与による眼毒性試験（マウス） [2006 年、GLP] <今回追加された	
27	試験>	40
28	(5) 肝ミクロソーム画分による <i>in vitro</i> 代謝試験	40
29	(6) 28 日間免疫毒性試験（ラット） [2005 年、GLP] <今回追加された試験>	40
30		
31	III. 食品健康影響評価	42
32		
33	・別紙 1：代謝物/分解物略称	45
34	・別紙 2：検査値等略称	46
35	・別紙 3：作物残留試験成績（国内）	47
36	・別紙 4：作物残留試験成績（海外）	55
37	・別紙 5：後作物残留試験成績	60
38	・別紙 6：推定摂取量	61

1	・参照.....	63
2		
3		

1 <審議の経緯>

2 ー第 1 版関係ー

- 2005 年 3 月 17 日 農林水産省から厚生労働省へ農薬登録申請に係る連絡及び基準値設定依頼（新規：だいず、キャベツ、もも等）
- 2005 年 3 月 31 日 厚生労働大臣から残留基準設定に係る食品健康影響評価について要請（厚生労働省発食安第 0331001 号）
- 2005 年 4 月 1 日 関係書類の接受（参照 1～41）
- 2005 年 4 月 7 日 第 89 回食品安全委員会（要請事項説明）
- 2005 年 6 月 15 日 第 31 回農薬専門調査会
- 2005 年 12 月 12 日 追加資料受理（参照 42）
- 2006 年 1 月 11 日 第 40 回農薬専門調査会
- 2006 年 4 月 3 日 追加資料受理（参照 43）
- 2006 年 8 月 2 日 第 3 回農薬専門調査会総合評価第一部会
- 2006 年 8 月 28 日 第 2 回農薬専門調査会幹事会
- 2006 年 9 月 7 日 第 158 回食品安全委員会（報告）
- 2006 年 9 月 7 日 から 2006 年 10 月 6 日まで 国民からの御意見・情報の募集
- 2006 年 10 月 23 日 農薬専門調査会座長から食品安全委員会委員長へ報告
- 2006 年 10 月 26 日 第 165 回食品安全委員会（報告）
（同日付け厚生労働大臣へ通知）（参照 44）
- 2007 年 2 月 27 日 残留農薬基準告示（参照 45）
- 2007 年 2 月 27 日 初回農薬登録

3

4 ー第 2 版関係ー

- 2007 年 10 月 19 日 農林水産省から厚生労働省へ適用拡大申請に係る連絡及び基準値設定依頼（なし、おうとう、きゅうり等）
- 2007 年 11 月 9 日 厚生労働大臣から残留基準設定に係る食品健康影響評価について要請（厚生労働省発食安第 1109009 号）
- 2007 年 11 月 12 日 関係書類の接受（参照 46～48）
- 2007 年 11 月 15 日 第 215 回食品安全委員会（要請事項説明）
- 2008 年 1 月 18 日 第 34 回農薬専門調査会幹事会
- 2008 年 1 月 29 日 農薬専門調査会座長から食品安全委員会委員長へ報告
- 2008 年 1 月 31 日 第 224 回食品安全委員会（報告）（参照 49）
（同日付け厚生労働大臣へ通知）

5

6 ー第 3 版関係ー

- 2009 年 6 月 8 日 インポートトレランス設定の要請（とうもろこし、かぼちゃ等）
- 2009 年 8 月 21 日 農林水産省から厚生労働省へ農薬登録申請に係る連絡及び基準値設定依頼（適用拡大：ブロッコリー、ばれいしょ等）

- 2009年 10月 27日 厚生労働大臣から残留基準設定に係る食品健康影響評価について要請（厚生労働省発食安 1027 第 4 号）、関係書類の接受（参照 50～55）
- 2009年 10月 29日 第 307 回食品安全委員会（要請事項説明）
- 2010年 6月 28日 第 63 回農薬専門調査会幹事会
- 2010年 7月 20日 農薬専門調査会座長から食品安全委員会委員長へ報告
- 2010年 7月 22日 第 341 回食品安全委員会（報告）
（同日付け厚生労働大臣へ通知）（参照 59）
- 2011年 7月 19日 残留農薬基準告示（参照 60）

1 ー第 4 版関係ー

- 2011年 11月 25日 農林水産省より厚生労働省へ農薬登録申請に係る連絡及び基準設定依頼（適用拡大：とうもろこし、そば等）
- 2011年 11月 30日 インポートトレランス設定の要請（ナッツ類）
- 2012年 1月 19日 厚生労働大臣より残留基準設定に係る食品健康影響評価について要請（厚生労働省発食安 0119 第 5 号）
- 2012年 1月 23日 関係書類の接受（参照 61～71）
- 2012年 1月 26日 第 416 回食品安全委員会（要請事項説明）
- 2012年 8月 24日 第 85 回農薬専門調査会幹事会

2

3

4 <食品安全委員会委員名簿>

(2006年 6月 30日まで)	(2006年 12月 20日まで)	(2009年 6月 30日まで)
寺田雅昭（委員長）	寺田雅昭（委員長）	見上 彪（委員長）
寺尾允男（委員長代理）	見上 彪（委員長代理）	小泉直子（委員長代理*）
小泉直子	小泉直子	長尾 拓
坂本元子	長尾 拓	野村一正
中村靖彦	野村一正	畑江敬子
本間清一	畑江敬子	廣瀬雅雄**
見上 彪	本間清一	本間清一

*：2007年 2月 1日から

**：2007年 4月 1日から

(2011年 1月 6日まで)	(2012年 6月 30日まで)	(2012年 7月 1日から)
小泉直子（委員長）	小泉直子（委員長）	熊谷 進（委員長）
見上 彪（委員長代理*）	熊谷 進（委員長代理*）	佐藤 洋（委員長代理）
長尾 拓	長尾 拓	山添 康（委員長代理）
野村一正	野村一正	三森国敏（委員長代理）

畑江敬子	畑江敬子	石井克枝
廣瀬雅雄	廣瀬雅雄	上安平冽子
村田容常	村田容常	村田容常
*: 2009 年 7 月 9 日から	*: 2011 年 1 月 13 日から	

1

2 <食品安全委員会農薬専門調査会専門委員名簿>

(2006 年 3 月 31 日まで)

鈴木勝士 (座長)	小澤正吾	出川雅邦
廣瀬雅雄 (座長代理)	高木篤也	長尾哲二
石井康雄	武田明治	林 真
江馬 眞	津田修治*	平塚 明
太田敏博	津田洋幸	吉田 緑
		*: 2005 年 10 月 1 日から

3

(2007 年 3 月 31 日まで)

鈴木勝士 (座長)	三枝順三	根岸友恵
廣瀬雅雄 (座長代理)	佐々木有	林 真
赤池昭紀	高木篤也	平塚 明
石井康雄	玉井郁巳	藤本成明
泉 啓介	田村廣人	細川正清
上路雅子	津田修治	松本清司
臼井健二	津田洋幸	柳井徳磨
江馬 眞	出川雅邦	山崎浩史
大澤貫寿	長尾哲二	山手丈至
太田敏博	中澤憲一	與語靖洋
大谷 浩	納屋聖人	吉田 緑
小澤正吾	成瀬一郎	若栗 忍
小林裕子	布柴達男	

(2008 年 3 月 31 日まで)

鈴木勝士 (座長)	佐々木有	根岸友恵
林 眞 (座長代理*)	代田眞理子****	平塚 明
赤池昭紀	高木篤也	藤本成明
石井康雄	玉井郁巳	細川正清
泉 啓介	田村廣人	松本清司
上路雅子	津田修治	柳井徳磨
臼井健二	津田洋幸	山崎浩史
江馬 眞	出川雅邦	山手丈至

大澤貫寿
太田敏博
大谷 浩
小澤正吾
小林裕子
三枝順三

長尾哲二
中澤憲一
納屋聖人
成瀬一郎***
西川秋佳**
布柴達男

與語靖洋
吉田 緑
若栗 忍
*: 2007年4月11日から
**: 2007年4月25日から
***: 2007年6月30日まで
****: 2007年7月1日から

(2010年3月31日まで)

鈴木勝士(座長)
林 真(座長代理)
相磯成敏
赤池昭紀
石井康雄
泉 啓介
今井田克己
上路雅子
臼井健二
太田敏博
大谷 浩
小澤正吾
川合是彰
小林裕子
三枝順三***

佐々木有
代田眞理子
高木篤也
玉井郁巳
田村廣人
津田修治
津田洋幸
長尾哲二
中澤憲一*
永田 清
納屋聖人
西川秋佳
布柴達男
根岸友恵
根本信雄

平塚 明
藤本成明
細川正清
堀本政夫
本間正充
松本清司
柳井徳磨
山崎浩史
山手丈至
與語靖洋
義澤克彦**
吉田 緑
若栗 忍
*: 2009年1月19日まで
**: 2009年4月10日から
***: 2009年4月28日から

(2012年3月31日から)

納屋聖人(座長)
林 真(座長代理)
相磯成敏
赤池昭紀
石井康雄
泉 啓介
上路雅子
臼井健二
太田敏博
小澤正吾
川合是彰

代田眞理子
高木篤也
玉井郁巳
田村廣人
津田修治
津田洋幸
長尾哲二
永田 清
長野嘉介
西川秋佳
布柴達男

福井義浩
藤本成明
細川正清
堀本政夫
本間正充
松本清司
柳井徳磨
山崎浩史
山手丈至
與語靖洋
義澤克彦

川口博明	根岸友恵	吉田 緑
小林裕子	根本信雄	若栗 忍
三枝順三	八田稔久	
佐々木有	平塚 明	

1

(2012年4月1日から)

納屋聖人 (座長)	佐々木有	細川正清
西川秋佳 (座長代理)	代田眞理子	堀本政夫
相磯成敏	玉井郁巳	本間正充
赤池昭紀	田村廣人	増村健一
浅野 哲	津田修治	松本清司
泉 啓介	永田 清	森田 健
上路雅子	長野嘉介	山崎浩史
小野 敦	根岸友恵	山手丈至
川口博明	根本信雄	與語靖洋
桑形麻樹子	八田稔久	義澤克彦
腰岡政二	福井義浩	吉田 緑
三枝順三	藤本成明	若栗 忍

2

3 <第85回農薬専門調査会幹事会専門参考人名簿>

小澤正吾	林 真
------	-----

4

5

6

7

1 要 約

2
3 ヨウ化フタルアミド基を有する殺虫剤である「フルベンジアミド」（CAS
4 No.272451-65-7）について、各種試験成績等を用いて食品健康影響評価を実施した。
5 なお、今回、ラット急性神経毒性試験、ラット免疫毒性試験、国内作物残留試験（と
6 うもろこし、そば等）、海外作物残留試験（アーモンド及びペカン）等が新たに提出
7 された。

8 評価に用いた試験成績は、動物体内運命（ラット）、植物体内運命（りんご、キャ
9 ベツ等）、作物残留、亜急性毒性（ラット、マウス及びイヌ）、慢性毒性（ラット及
10 びイヌ）、発がん性（ラット及びマウス）、繁殖（ラット）、発生毒性（ラット及び
11 ウサギ）、遺伝毒性等の試験成績である。

12 各種毒性試験結果から、フルベンジアミド投与による影響は、主に肝臓（肝細胞肥
13 大、肝細胞脂肪化等）及び甲状腺（ろ胞上皮細胞肥大等）に認められた。神経毒性、
14 発がん性、繁殖能に対する影響、催奇形性、発達神経毒性及び遺伝毒性は認められな
15 かった。

16 各試験で得られた無毒性量のうち最小値は、ラットを用いた 2 年間発がん性試験の
17 1.70 mg/kg 体重/日であったことから、これを根拠として、安全係数 100 で除した
18 0.017 mg/kg 体重/日を一日摂取許容量（ADI）と設定した。

19
20

1 I. 評価対象農薬の概要

2 1. 用途

3 殺虫剤

4

5 2. 有効成分の一般名

6 和名：フルベンジアミド

7 英名：flubendiamide (ISO名)

8

9 3. 化学名

10 IUPAC

11 和名：3-ヨード-*N*²-(2-メシル-1,1-ジメチルエチル)-*N*{4-[1,2,2,2-
12 テトラフルオロ-1-(トリフルオロメチル)エチル]-*o*-トリル}フタルアミド

13 英名：3-iodo-*N*²-(2-mesyl-1,1-dimethylethyl)-*N*{4-[1,2,2,2-
14 tetrafluoro-1-(trifluoromethyl)ethyl]-*o*-tolyl}phthalamide

15

16 CAS (No. 272451-65-7)

17 和名：*N*²[1,1-ジメチル-2-(メチルスルホニル)エチル]-3-ヨード-*N*²{2-メチル-
18 4-[1,2,2,2-テトラフルオロ-1-(トリフルオロメチル)エチル]フェニル}-1,2-
19 ベンゼンジカルボキサミド

20 英名：*N*²[1,1-dimethyl-2-(methylsulfonyl)ethyl]-3-iodo-*N*²{2-methyl-
21 4-[1,2,2,2-tetrafluoro-1-(trifluoromethyl)ethyl]phenyl}-1,2-
22 benzenedicarboxamide

23

24 4. 分子式

25 C₂₃H₂₂F₇IN₂O₄S

26

27 5. 分子量

28 682.39

29

30 6. 構造式

31

32

33

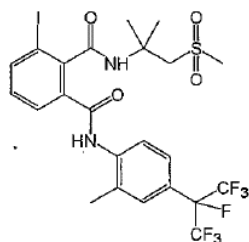
34

35

36

37

38



1 **7. 開発の経緯**

2 フルベンジアミドは、1998年に日本農薬株式会社により開発されたヨウ化フタ
3 ルアミド基を有する殺虫剤である。本剤は、鱗翅目害虫の筋肉細胞小胞体のカルシ
4 ウムイオンチャンネルに作用し、体収縮症状をもたらして殺虫活性を示す。

5 我が国では2007年2月27日に初回農薬登録され、欧州及び米国を始めとする
6 諸外国においても登録されている。今回、農薬取締法に基づく農薬登録申請（適用
7 拡大：とうもろこし、そば等）及びインポートトレランス設定の要請（ナッツ類）
8 がされている。

9

1 II. 安全性に係る試験の概要

各種運命試験 [II.1~4] は、フルベンジアミドのフタル酸環を ^{14}C で標識したもの（以下「[pht- ^{14}C]フルベンジアミド」という）及びアニリン環を ^{14}C で標識したもの（以下「[ani- ^{14}C]フルベンジアミド」という）を用いて実施された。放射能濃度及び代謝物濃度は特に断りがない場合はフルベンジアミドに換算した。代謝物/分解物及び検査値等略称は別紙 1 及び 2 に示されている。

1. 動物体内運命試験

(1) ラット（単回経口投与）

① 吸収

a. 血中濃度推移

Fischer ラット（一群雌雄各 4 匹）に [pht- ^{14}C]フルベンジアミドを 2 mg/kg 体重（以下 [1. (1)] において「低用量」という）又は 200 mg/kg 体重（以下 [1. (1)] において「高用量」という）で単回経口投与し、血中濃度推移について検討された。

全血及び血漿中薬物動態学的パラメータは表 1 に示されている。

フルベンジアミドの吸収は比較的緩やかであった。雌雄間の血漿中濃度を比較すると、雌において若干緩やかな減衰が認められた。また、全血中濃度と血漿中濃度の差は時間が経つにつれて小さくなっていったことから、フルベンジアミドは血球中に若干分布することが考えられた。

雌雄とも高用量群では、低用量群の数倍の C_{\max} が観察されたのみであり、フルベンジアミドの吸収はほとんど飽和しているものと考えられた。（参照 2）

表 1 全血及び血漿中薬物動態学的パラメータ

投与量		2 mg/kg 体重				200 mg/kg 体重			
		雄		雌		雄		雌	
性別		血液		血漿		血液		血漿	
試料		血液	血漿	血液	血漿	血液	血漿	血液	血漿
濃度推移 ($\mu\text{g/g}$)	投与 1 時間後	0.056	0.083	0.063	0.092	0.3	<0.1	0.3	<0.1
	投与 6 時間後	0.167	0.218	0.142	0.196	0.4	0.4	0.5	0.3
	投与 12 時間後	0.182	0.233	0.126	0.171	0.4	0.5	0.4	0.4
	投与 48 時間後	0.027	0.016	0.055	0.066	0.5	<0.1	0.5	<0.1
T_{\max} (hr)		12	12	6	6	48	12	6-48	12
C_{\max} ($\mu\text{g/g}$)		0.182	0.233	0.142	0.196	0.5	0.5	0.5	0.4
$T_{1/2}$ (hr)		28.7	12.6	41.1	37.6	NA	NA	NA	NA
AUC (hr · $\mu\text{g/g}$)		5.45	5.58	7.62	9.18	NA	NA	NA	NA

NA：データポイント数不足のため算出せず

b. 吸収率

胆汁中排泄試験 [1. (1)④ b.] における、投与後 48 時間の胆汁及び尿中に排泄された放射能並びに体内に残存した放射能の合計より、消化管からの吸収率は雄で少なくとも 23.5%、雌で少なくとも 34.1%と推定された。（参照 4）

② 分布

Fischer ラット（一群雌雄各 4 匹）に[pht-¹⁴C]フルベンジアミドを低用量若しくは高用量又は[ani-¹⁴C]フルベンジアミドを低用量でそれぞれ単回経口投与し、体内分布試験が実施された。

主要組織の残留放射能濃度は表 2 に示されている。

投与 9 時間後では、吸収部位である消化管（胃、小腸及び大腸）、肝臓、腎臓、副腎、脂肪等に比較的高濃度の分布が認められた。投与 168 時間後では、すべての臓器及び組織中放射能濃度は、定量限界付近にまで減衰しており、フルベンジアミド及びその代謝物に蓄積性がないことが示唆された。（参照 2）

表 2 主要組織の残留放射能濃度 (μg/g)

投与量	標識体	性別	投与 9 時間後	投与 168 時間後
2 mg/kg 体重	[pht- ¹⁴ C] フルベン ジアミド	雄	肝臓(2.42)、副腎(1.90)、白色脂肪(1.42)、大腸(1.26)、腎臓(1.07)、小腸(0.951)、骨髄(0.679)、心臓(0.676)、唾液腺(0.606)、膵臓(0.603)、肺(0.584)、胃(0.568)、甲状腺(0.566)、脾臓(0.409)、胸腺(0.376)、筋肉(0.319)、下垂体(0.290)、その他(0.28未満)	肝臓(0.031)、白色脂肪(0.009)、副腎(0.007)、腎臓(0.005)、その他(0.005未満)
		雌	大腸(0.857)、肝臓(0.657)、白色脂肪(0.536)、副腎(0.463)、小腸(0.227)、胃(0.188)、唾液腺(0.182)、腎臓(0.178)、膵臓(0.159)、骨髄(0.157)、卵巣(0.155)、甲状腺(0.150)、心臓(0.143)、肺(0.136)、子宮(0.123)、脾臓(0.114)、胸腺(0.097)、下垂体(0.090)、膀胱(0.072)、筋肉(0.070)、その他(0.03未満)	肝臓(0.407)、白色脂肪(0.331)、副腎(0.137)、骨髄(0.105)、小腸(0.067)、卵巣(0.062)、膵臓(0.060)、腎臓(0.059)、唾液腺(0.057)、大腸(0.052)、胃(0.045)、甲状腺(0.038)、肺(0.039)、心臓(0.037)、胸腺(0.033)、子宮(0.033)、脾臓(0.030)、膀胱(0.026)、筋肉(0.023)、下垂体(0.020)、その他(0.01未満)
	[ani- ¹⁴ C] フルベン ジアミド	雄		肝臓(0.016)、腎臓(0.006)、膀胱(0.006)、白色脂肪(0.006)、その他(0.004未満)
		雌		肝臓(0.555)、白色脂肪(0.440)、副腎(0.208)、骨髄(0.169)、小腸(0.098)、卵巣(0.089)、膵臓(0.085)、唾液腺(0.083)、甲状腺(0.082)、腎臓(0.074)、大腸

				(0.066)、胃(0.064)、心臓(0.055)、子宮(0.053)、肺(0.052)、下垂体(0.045)、脾臓(0.045)、胸腺(0.044)、膀胱(0.033)、その他(0.02未満)
200 mg/kg 体重	[pht- ¹⁴ C]フルベンジアミド	雄	大腸(60.2)、胃(28.1)、小腸(7.9)、下垂体(3.1)、白色脂肪(2.6)、副腎(2.4)、肝臓(2.2)、甲状腺(1.4)、腎臓(1.1)、唾液腺(1.1)、骨髄(0.9)、胸腺(0.8)、精巣(0.8)、前立腺(0.8)、心臓(0.7)、肺(0.6)、脾臓(0.6)、膵臓(0.6)、その他(0.6未満)	肝臓(0.1)、白色脂肪(0.1)、その他(定量限界未満)
		雌	大腸(103)、胃(12.5)、白色脂肪(4.8)、小腸(4.2)、肝臓(3.8)、副腎(3.4)、子宮(3.2)、甲状腺(2.5)、唾液腺(2.4)、膵臓(1.5)、骨髄(1.5)、腎臓(1.3)、心臓(1.0)、肺(1.0)、脾臓(1.0)、胸腺(0.9)、卵巣(0.9)、筋肉(0.6)、膀胱(0.5)、その他(0.5未満)	骨髄(0.5)、白色脂肪(0.4)、肝臓(0.3)、唾液腺(0.2)、膵臓(0.2)、腎臓(0.1)、胃(0.1)、小腸(0.1)、大腸(0.1)、その他(定量限界未満)

1 / : 試料採取せず

2

3

③ 代謝

4

尿及び糞中排泄試験 [1. (1)④ a.] で得られた投与後 72 時間（低用量）又は
 5 投与後 24 時間（高用量）の尿及び糞、並びに胆汁排泄試験 [1. (1)④ b.] で得
 6 られた投与後 48 時間の胆汁、糞及び消化管内容物を試料とした代謝試験が実施
 7 された。

8

尿、糞、胆汁及び消化管内容物における代謝物は表 3 に示されている。

9

ラットにおけるフルベンジアミドの主要代謝経路は、トルイジン環 2 位メチル
 10 基の酸化、チオアルキルアミン部分のメチル基の酸化であると推定された。さら
 11 に、これらの代謝物は、グルクロン酸及びグルタチオン抱合の経路により代謝が
 12 進行すると考えられた。（参照 2～4）

13

14

表 3 尿、糞、胆汁及び消化管内容物における代謝物 (%TAR)

投与量	標識体	性別	試料	フルベンジアミド	代謝物
2 mg/kg 体重	[pht- ¹⁴ C]フルベンジアミド	雄	尿	0.01	E(0.5)、H(0.03)、F(0.01)、その他(0.9未満)
			糞	15.4	E(37.3)、H(16.4)、F(0.4)、その他(4未満)
		雌	尿	0.09	E(0.05)、H(0.01)、F(<0.01)、その他(0.08未満)
			糞	65.8	E(5.4)、H(<0.01)、F(<0.01)、その他(5未満)

	[ani- ¹⁴ C] フルベン ジアミド	雄	尿	0.04	E(0.4)、H(0.05)、F(0.03)、その他(0.8 未 満)
			糞	30.4	E(30.8)、H(14.9)、F(0.3)、その他(4 未 満)
		雌	尿	0.21	E(0.05)、H(0.01)、F(<0.01)、その 他(0.11 未満)
			糞	65.7	E(5.7)、H(0.1)、F(<0.01)、その他(5 未 満)
	[pht- ¹⁴ C] フルベン ジアミド	雄	胆汁	—	E(1.3)、H(2.3)、G(1.8)、R(0.3)、その他 (1.5 未満)
			糞	12.0	E(0.6)
雌		胆汁	—	E(0.1)、G(0.2)、R(0.2)	
		糞	10.7	E(0.1)	
200 mg/kg 体重	[pht- ¹⁴ C] フルベン ジアミド	雄	尿	0.04	E(0.01)、その他(0.02 未満)
			糞	89.1	F(0.3)、E(0.2)、その他(0.3 未満)
		雌	尿	<0.01	E(<0.01)、その他(0.04 未満)
			糞	97.8	F(0.3)、E(<0.01)、その他(0.4 未満)

1 —：検出されず

2

3 ④ 排泄

4 a. 尿及び糞中排泄

5 Fischer ラット（一群雌雄各 4 匹）に [pht-¹⁴C]フルベンジアミドを低用量若し
6 くは高用量又は [ani-¹⁴C]フルベンジアミドを低用量でそれぞれ単回経口投与し、
7 尿及び糞中排泄試験が実施された。

8 投与後 24 及び 168 時間の尿及び糞中排泄率は表 4 に示されている。雌雄とも
9 にほとんどが糞中排泄であった。（参照 2）

10

11

表 4 尿及び糞中排泄率 (%TAR)

標識体	[pht- ¹⁴ C]フルベンジアミド								[ani- ¹⁴ C]フルベンジアミド			
	2 mg/kg 体重				200 mg/kg 体重				2 mg/kg 体重			
	雄		雌		雄		雌		雄		雌	
試料	尿	糞	尿	糞	尿	糞	尿	糞	尿	糞	尿	糞
投与後 24 時間	1.3	77.0	0.2	58.2	0.1	89.9	0.1	98.5	1.2	79.0	0.3	54.5
投与後 168 時間	1.8	96.2	0.6	91.4	0.5	93.6	0.6	99.6	1.7	93.6	1.1	91.5

12 注) 投与後 168 時間の尿はケージ洗浄液を含む。

1
2
3
4
5
6
7**b. 胆汁中排泄**

胆管カニューレを挿入した Fischer ラット（雄 3 匹、雌 6 匹）に[pht-¹⁴C]フルベンジアミドを低用量で単回経口投与し、胆汁中排泄試験が実施された。

投与後 48 時間の胆汁、尿及び糞中排泄率は表 5 に示されている。（参照 4）

表 5 投与後 48 時間の胆汁、尿及び糞中排泄率（%TAR）

投与量	2 mg/kg 体重	
	雄	雌
胆汁	11.1	3.3
尿	0.8	0.2
糞	12.8	11.0
肝	3.28	5.50
消化管	2.49	2.42
カーカス ¹	5.92	22.8

8

【永田専門委員より】

表 5 の各値の合計が半分以下ですが、残りはどうなったのでしょうか。他のデータと異なっているように見えます。

【事務局より】

投与後 48 時間における雄及び雌の消化管内容物に、それぞれ 60.4%TAR 及び 50.6%TAR の放射能が検出されており、放射能回収率は雌雄とも 95%以上であります。表 5 では未吸収の残存放射能として「消化管内容物」の数値は記載されておられません。

9
10
11
12
13
14
15
16
17
18**(2) ラット（反復経口投与）****① 血中濃度推移**

Fischer ラット（一群雌雄各 4 匹）に[pht-¹⁴C]フルベンジアミドを低用量で 14 日間反復経口投与し、血中濃度推移について検討された。

全血及び血漿中放射能濃度推移は表 6 に示されている。

血中濃度の消失推移は単回経口投与における場合と同様であったが、雌では雄に比べ放射能濃度の消失が遅い傾向が認められた。（参照 3）

表 6 全血及び血漿中放射能濃度推移（ $\mu\text{g/g}$ ）

投与量	2 mg/kg 体重			
	雄		雌	
試料	血液	血漿	血液	血漿
最終投与 9 時間後	0.157	0.173	0.135	0.168

¹ 組織・臓器を取り除いた残渣のことをカーカスという。

最終投与 24 時間後	0.094	0.089	0.108	0.137
最終投与 168 時間後	0.009	—	0.028	0.034

—：検出されず

② 分布

Fischer ラット（一群雌雄各 4 匹）に[pht-¹⁴C]フルベンジアミドを低用量で 14 日間反復経口投与し、体内分布試験が実施された。

最終投与 168 時間後における主要組織の残留放射能濃度は表 7 に示されている。

特異的にフルベンジアミド又はその代謝物が残留する臓器及び組織は認められず、反復投与においても、フルベンジアミド及び代謝物には蓄積性がないことが示された。（参照 3）

表 7 主要組織の残留放射能濃度 (µg/g)

投与量	標識体	性別	最終投与 168 時間後
2 mg/kg 体重	[pht- ¹⁴ C] フルベン ジアミド	雄	下垂体(0.189)、白色脂肪(0.048)、肝臓(0.038)、甲状腺(0.031)、前立腺(0.021)、副腎(0.018)、腎臓(0.017)、脾臓(0.012)、肺(0.011)、その他(0.009 以下)
		雌	白色脂肪(1.71)、肝臓(1.64)、副腎(0.603)、骨髄(0.457)、小腸(0.317)、膵臓(0.273)、腎臓(0.248)、唾液腺(0.241)、卵巣(0.230)、胃(0.215)、大腸(0.211)、甲状腺(0.198)、肺(0.194)、心臓(0.188)、胸腺(0.152)、脾臓(0.151)、骨(0.107)、子宮(0.105)、膀胱(0.100)、下垂体(0.098)、筋肉(0.082)、血漿(0.034)、その他(0.028 以下)

③ 代謝

[pht-¹⁴C]フルベンジアミドを用いた尿及び糞中排泄試験 [1. (2)④ a.] で得られた最終投与後 72 時間の尿及び糞を試料とした代謝試験が実施された。

糞中においては親化合物が 82.2～91.3%TAR を占め、他に主要代謝物として E が 2.2～7.2%TAR、H が<0.01～2.8%TAR 認められた。その他に未同定代謝物が検出されたが、1%TAR 未満と微量であった。尿中には 0.2～0.5%TAR しか排泄されず、親化合物及び E が検出された。（参照 2～4）

④ 排泄

a. 尿及び糞中排泄

Fischer ラット（一群雌雄各 4 匹）に[pht-¹⁴C]フルベンジアミドを低用量で 14 日間反復経口投与し、尿及び糞中排泄試験が実施された。

最終投与後 24 及び 168 時間の尿及び糞中排泄率は表 8 に示されている。雌雄ともにほとんどが糞中に排泄された。（参照 3）

1

表 8 尿及び糞中排泄率 (%TAR)

投与量	2 mg/kg 体重			
	雄		雌	
性別				
試料	尿	糞	尿	糞
最終投与後 24 時間	0.48	102	0.20	101
最終投与後 168 時間	0.57	103	0.31	104

2

注) 最終投与後 168 時間の尿はケージ洗浄液を含む。

3

4 2. 植物体内運命試験

5 (1) りんご

6 りんご（品種：ふじ）に[pht-¹⁴C]フルベンジアミド又は[ani-¹⁴C]フルベンジア
7 ミドを 200 g ai/ha で散布し、散布 0、7、14、28 及び 56 日後（成熟期）に採取
8 された果実及び葉を試料とした植物体内運命試験が実施された。

9 りんご試料中放射能濃度は表 9 に示されている。

10 総残留放射能濃度は、果実及び葉のいずれも処理当日に最高値を示し、その後
11 は経時的に漸減した。

12 果実では、親化合物及び B の他、未同定代謝物が処理直後に 6.3%TRR 未満
13 (0.002 mg/kg 未満)、処理 56 日後に 18.2%TRR 未満 (0.002 mg/kg 未満) 検
14 出された。

15 葉では、親化合物、B、C、E、H、P 及び Q の他、未同定代謝物が処理直後
16 で 0.5～3.1%TRR (0.024～0.139 mg/kg)、処理 56 日後で 1.6～13.0%TRR (0.021
17 ～0.188 mg/kg) 検出された。（参照 5）

18

19

表 9 りんご試料中放射能濃度

標識体	[pht- ¹⁴ C]フルベンジアミド							
	果実				葉			
試料	0 日		56 日		0 日		56 日	
	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg
総残留放射能	100	0.016	100	0.011	100	4.51	100	1.44
親化合物	93.8	0.015	54.5	0.006	106	4.76	52.9	0.763
B	-	-	<18.2	<0.002	0.8	0.035	7.2	0.104
C	-	-	-	-	-	-	0.7	0.010
E	-	-	-	-	0.1	0.004	2.1	0.031
H	-	-	-	-	0.4	0.017	3.5	0.050
P	-	-	-	-	0.2	0.011	-	-
Q	-	-	-	-	-	-	2.1	0.030
標識体	[ani- ¹⁴ C]フルベンジアミド							
	果実				葉			
試料	0 日		56 日		0 日		56 日	
	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg
総残留放射能	100	0.043	100	0.010	100	4.45	100	1.64

親化合物	81.4	0.035	50.0	0.005	104	4.61	62.4	1.03
B	<4.7	<0.002	<10.0	<0.001	1.5	0.069	6.9	0.114
C	-	-	-	-	-	-	4.4	0.072
E	-	-	-	-	0.3	0.013	2.6	0.043
H	-	-	-	-	0.3	0.013	3.3	0.054
P	-	-	-	-	2.3	0.103	-	-

1

2 (2) キャベツ

3 キャベツ（品種：YR-晴徳）に[pht-¹⁴C]フルベンジアミド又は[ani-¹⁴C]フルベ
4 ンジアミドを 1 個体当たり 0.3 mg で処理し、処理 21 及び 42 日後（成熟期）に
5 植物体を結球部、外葉部及び根部の部位毎に分割して採取された試料を用いた植
6 物体内運命試験が実施された。

7 処理 21 及び 42 日後ともに、処理放射能のほとんど（101～108%TAR）は外
8 葉部で検出され、表面洗浄画分に 77.5%TRR 以上が検出された。

9 キャベツ外葉部における放射能濃度は表 10 に示されている。

10 外葉部では、親化合物、代謝物 B、C、E 及び H の他、未同定代謝物が 0.2%TRR
11 以下（0.012 mg/kg 以下）検出された。

12 結球中の放射能濃度は低く、0.001 mg/kg 以下であった。

13 （参照 6）

14

15

表 10 キャベツ外葉部における放射能濃度

試料	[pht- ¹⁴ C]フルベンジアミド				[ani- ¹⁴ C]フルベンジアミド			
	21 日		42 日		21 日		42 日	
	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg
総残留放射能	100	0.59	100	0.59	100	0.70	100	0.61
親化合物	90.2	0.53	90.2	0.54	90.7	0.64	89.3	0.54
B	1.3	0.008	1.5	0.009	1.3	0.009	1.5	0.009
C	0.7	0.004	1.3	0.008	1.0	0.007	1.5	0.009
E	0.3	0.002	0.5	0.003	0.4	0.003	0.7	0.005
H	0.1	0.001	0.3	0.002	0.2	0.002	0.5	0.003

16

17 (3) トマト

18 ミニトマト（品種：千果）に、[pht-¹⁴C]フルベンジアミド又は[ani-¹⁴C]フルベ
19 ンジアミドを果実に 1 枝当たり 0.125 mg、葉に 1 枝当たり 0.80 mg 処理し、処
20 理 0、7、14 及び 28 日後に採取された処理部位の果実及び葉、処理 28 日後では
21 その他の部位全体（根部含む）を試料として採取し、植物体内運命試験が実施さ
22 れた。

23 放射能は、果実では処理直後の 99.1～99.3%TAR（3.24～3.38 mg/kg）から処
24 理 28 日後の 65.9～68.7%TAR（1.32～1.49 mg/kg）と緩やかに減少した。葉で
25 は、いずれの時期においても 89.9～106%TAR（14.9～45.4 mg/kg）とほぼ定量

的に回収された。処理 28 日後におけるその他の部位全体への分布は、1.1% TAR^2 と僅かであった。果実及び葉とも、表面洗浄液に 94.4%TRR 以上が検出された。

トマト果実及び葉における放射能濃度は表 11 に示されている。

果実では、処理直後に親化合物及び C が検出された他、未同定代謝物が総和で 0.43~0.46%TRR (0.0146~0.0150 mg/kg) 検出された。[pht- ^{14}C]フルベンジアミド処理区ではさらに B が検出された。処理 28 日後には、親化合物、B、C、E 及び H が検出された他、未同定代謝物が総和で 2.3%TRR (0.0306~0.0336 mg/kg) 検出された。

葉では、処理直後に親化合物が検出された他、未同定代謝物が 0.83~0.84%TRR (0.365~0.381 mg/kg) 検出された。[pht- ^{14}C]フルベンジアミド処理区ではさらに B 及び C が検出された。処理 28 日後では、親化合物、B、C、E、H 及び N が検出された。（参照 7）

表 11 トマト試料中放射能濃度

標識体	[pht- ^{14}C]フルベンジアミド							
試料	果実				葉			
処理後日数	0 日		28 日		0 日		28 日	
	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg
総残留放射能	100	3.24	100	1.32	100	44.1	100	16.5
親化合物	99.5	3.22	96.2	1.27	99.1	43.7	90.9	15.0
B	0.05	0.0016	0.50	0.0066	0.04	0.0165	0.53	0.087
C	0.04	0.0013	0.23	0.003	0.05	0.0022	0.24	0.039
E	-	-	0.38	0.005	-	-	0.40	0.066
H	-	-	0.26	0.0034	-	-	0.33	0.055
N	-	-	0.07	0.0009	-	-	0.10	0.017
標識体	[ani- ^{14}C]フルベンジアミド							
試料	果実				葉			
処理後日数	0 日		28 日		0 日		28 日	
	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg
総残留放射能	100	3.38	100	1.49	100	45.4	100	14.9
親化合物	99.5	3.36	96.6	1.43	99.1	45.0	95.2	14.2
B	-	-	0.32	0.0048	-	-	0.36	0.054
C	0.04	0.0012	0.18	0.0027	-	-	0.20	0.030
E	-	-	0.32	0.0048	-	-	0.32	0.0478
H	-	-	0.29	0.0043	-	-	0.36	0.053

(4) 水稻 [2004 年、GLP] <今回追加された試験>

出穂直前の水稻（品種：日本晴）に[pht- ^{14}C]フルベンジアミドを 100 g ai/ha で散布し、処理直後 0、4 及び 9 週後（成熟期）に種子、茎葉及び根部試料を採取して植物体内運命試験が実施された。上路専門委員修文。また、9 週後の試料と

² その他の部位における放射エネルギーは、果実及び葉への処理放射エネルギーの合計に対する割合。

1 して、一旦地上部を自然乾燥させたのち採取された試料も用いられた。
 2 水稻試料中放射能濃度は表 12 に示されている。
 3 残留放射能の大部分は茎葉部に認められ、種子（粃）及び根部の放射能残留は、
 4 それぞれ 0.053%TRR 及び 0.008%TRR と低レベルであった。また、成熟粃を玄
 5 米及び粃殻に分画した場合、玄米への放射能の移行はさらに低かった
 6 (0.001%TRR)。茎葉部の放射能は、表面洗浄液に 69.2%TRR 以上が検出され
 7 た。
 8 代謝物分析の結果、試料採取時期及び部位を問わず、88.8%TRR 以上が未変化
 9 のフルベンジアミドであり、代謝物 B、C、E 及び H が僅かに検出されたが、
 10 10%TRR を超える代謝物は認められなかった。（参照 62、63）
 11 (農薬抄録：419~422 頁)

13 表 12 水稻試料中放射能濃度 上路専門委員修正

採取時期	0週処理直後		4週		9週		9週（乾燥後）			
	茎葉部		茎葉部		茎葉部		茎葉部		粃殻	
	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg
総残留放射能	100	2.12	100	0.623	100	1.41	100	3.04	100	0.052
親化合物	100	2.12	95.7	0.596	95.4	1.34	92.9	2.82	88.8	0.046
B	-	-	3.1	0.019	2.9	0.041	4.1	0.126	4.0	0.002
C	-	-	0.3	0.002	0.5	0.007	0.5	0.014	-	-
E	-	-	0.1	0.001	0.3	0.004	0.5	0.014	-	-
H	-	-	-	-	0.1	0.001	0.1	0.004	-	-

14 -: 検出限界以下 /: 計測せず

16 (5) とうもろこし [2002年、GLP] <今回追加された試験>

17 とうもろこし（品種：不明）の雄穂抽出期（BBCH59）に[pht-¹⁴C]フルベンジ
 18 アミド又は[ani-¹⁴C]フルベンジアミドを 1 個体当たり 14.7 mg で 7 日間隔で 4
 19 回葉面全体に塗布処理し、最終処理 1 日（BBCH73-75/乳熟期）及び 22 日
 20 （BBCH97/成熟期）後に雌穂及び茎葉部を採取して、植物体内運命試験が実施
 21 された。
 22 とうもろこし試料中放射能濃度は表 13 に示されている。
 23 いずれの標識体を処理した場合においても、茎葉部で顕著な残留放射能が検出
 24 されたが、スイートコーンあるいは完熟種子における放射能は低値（スイートコ
 25 ーン：0.001~0.010 mg/kg、種子：0.003~0.016 mg/kg）であった。
 26 茎葉部のアセトニトリル/水抽出画分における代謝物分析の結果、採取時期及び
 27 標識位置にかかわらず 68%TRR 以上が親化合物であり、10%TRR を超える代謝
 28 物として B が検出された。（参照 62、64）

29 (農薬抄録：423~426 頁)

1 表 13 とうもろこし茎葉部中放射能濃度

標識体	[pht- ¹⁴ C]フルベンジアミド				[ani- ¹⁴ C]フルベンジアミド			
	1 日		22 日		1 日		22 日	
	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg
総残留放射能	100	0.288	100	0.476	100	0.599	100	0.379
親化合物	74	0.212	68	0.324	86	0.513	81	0.308
B	18	0.050	8	0.036	5	0.029	9	0.037

2
3 植物体内におけるフルベンジアミドの主要代謝経路は、光分解によりヨウ素原子
4 が脱離した代謝物 B 及び C の生成、トルイジン環メチル基の酸化による代謝物 E
5 及び H の生成と考えられた。

7 3. 土壤中運命試験

8 (1) 好氣的土壤中運命試験

9 [pht-¹⁴C]フルベンジアミド又は[ani-¹⁴C]フルベンジアミドを埴壤土（高知）に
10 乾土当たり約 0.4 mg/kg となるように添加後、25℃の暗条件下で 180 日間インキ
11 ュベートし、好氣的土壤中運命試験が実施された。

12 親化合物は、処理 56 日後で 98.9～100%TAR、試験終了時（処理 180 日後）
13 で 98.0～99.0%TAR 検出された。微量ではあるが、分解物 B、E 及び H が試験
14 終了時にそれぞれ 0.2、0.2～0.4 及び 0.4～0.7%TAR 検出された。

15 フルベンジアミドの分解は極めて緩やかであり、推定半減期は 180 日以上であ
16 った。（参照 8）

18 (2) 土壤表面光分解試験

19 [pht-¹⁴C]フルベンジアミド又は[ani-¹⁴C]フルベンジアミドを砂土（米国カリフ
20 ォルニア州）で調製した厚さ 1～2 mm の土壤薄層に、乾土当たり 1.3 µg/g とな
21 るように添加後、20℃±1℃でキセノンアークランプ（光強度：583 W/m²、波長：
22 300～800 nm）を 11 日間連続照射して土壤表面光分解試験が実施された。

23 光照射区において、親化合物は経時的に減少し、処理 11 日後には 47.9～
24 49.7%TAR になった。また、分解物 B 及び M がそれぞれ 15.5～17.6 及び 1.5～
25 8.2%TAR 検出された。暗所対照区では、処理 11 日後においても親化合物はほと
26 んど分解されず、92.6～99.9%TAR が残存していた。

27 フルベンジアミドの推定半減期は、本試験条件下では 11.0～11.4 日、米国に
28 おける太陽光下では 33.6～34.9 日と換算³された。

29 土壤表面において、フルベンジアミドは速やかに分解物 B へ分解されることが
30 示された。また、分解物 B も土壤中では安定ではなく、分解物 M を経由し速や
31 かに CO₂ 及び未抽出残渣にまで分解されることが示された。（参照 9）

³ 米国の隣接する 48 州の年間平均の太陽光強度 190 W/m²を基準として換算した。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38

(3) 土壤吸脱着試験

4 種類の国内土壤 [軽埴土 (高知)、壤土 (北海道)、軽埴土 (和歌山) 及び砂土 (宮崎)] を用いた土壤吸脱着試験が実施された。

Freundlich の吸着係数 K_{ads} は 26.9~54.6 であり、有機炭素含有率により補正した吸着係数 K_{oc} は 1,550~3,660 であった。また、脱着係数 K_{des} は 36.2~52.1 であった。

フルベンジアミドは、土壤において僅かな移行性があると考えられた。(参照 10)

4. 水中運命試験

(1) 加水分解試験

[pht-¹⁴C]フルベンジアミド又は[ani-¹⁴C]フルベンジアミドを pH 4 (酢酸緩衝液)、pH 5 (酢酸緩衝液、25°C試験区のみ)、pH 7 (リン酸緩衝液) 及び pH 9 (ホウ酸緩衝液) の各緩衝液に 12.1 µg/L となるように加えた後、25°Cで 30 日間又は 50°Cで 5 日間インキュベートし、加水分解試験が実施された。

各処理区において、親化合物は 90.5~101% TAR 回収された。フルベンジアミドは、本試験条件下で加水分解に対し安定であった。(参照 11)

(2) 水中光分解試験

[pht-¹⁴C]フルベンジアミド又は[ani-¹⁴C]フルベンジアミドを蒸留水 (pH 6.0~6.2)、自然水 [地下水 (大阪)、pH 7.4] 及び光増感剤として 1%アセトンを含む蒸留水 (いずれの試験水も滅菌後に使用) に 12.5 µg/L となるように加えた後、25°Cでキセノンアークランプ (光強度: 623~640 W/m²、波長: 280~800 nm) を 7 日間連続照射し、水中光分解試験が実施された。

親化合物は光照射により速やかに分解され、処理 7 日後に検出されたのは 31.3~46.7% TAR であった。

光分解物としては B、C 及び D が同定され、処理 7 日後にはそれぞれ 10.1~31.9、0.6~2.2 及び 0.2~11.6% TAR 検出された。

各水中の光照射区において、初期の主要分解物は B 及び C であり、C は後期に D へと分解されるものと推定された。暗所対照区においては、定量的な親化合物の回収が認められ、顕著な分解物は検出されなかった。

自然水中では、蒸留水中に比べ、親化合物の若干速やかな減衰が認められた。

フルベンジアミドの推定半減期は光照射区において 4.3~6.5 日であり、北緯 35 度 (東京) 春の自然太陽光下では 25.2~32.5 日と推定された。(参照 12)

5. 土壤残留試験

火山灰土・軽埴土 (熊本) 及び沖積土・埴壤土 (高知) を用いて、フルベンジア

ミド、分解物 B、C 及び D（圃場のみ）を分析対象化合物とした土壌残留試験（容器内及び圃場）が実施された。結果は表 14 に示されている。（参照 13）

表 14 土壌残留試験成績

試験	濃度※	土壌	推定半減期	
			フルベンジアミド	フルベンジアミド+分解物
容器内試験	0.4 mg/kg	火山灰土・軽埴土	1 年以上	1 年以上
		沖積土・埴壤土	1 年以上	1 年以上
圃場試験	300 g ai/ha	火山灰土・軽埴土	247 日	250 日
		沖積土・埴壤土	34 日	34 日

※容器内試験で純品、圃場試験で顆粒水和剤を使用

6. 作物等残留試験

(1) 作物残留試験

野菜、果実、豆類及び茶を用いて、フルベンジアミド、代謝物 B 及び C（C の分析は国内のみ）を分析対象化合物とした作物残留試験が実施された。

国内での試験結果については別紙 3 に、海外での試験結果については別紙 4 に示されている。

国内で栽培されている農産物におけるフルベンジアミドの最大残留値は、最終散布 7 日後に収穫した茶（荒茶）の **34.9 mg/kg** であった。代謝物 B の最大残留値は、最終散布 1 日後に収穫したリーフレタスの **0.20 mg/kg** であったが、ほとんど定量限界未満であった。代謝物 C は全データが定量限界未満であった。

海外で栽培されている農産物におけるフルベンジアミドの最大残留値は、最終散布 1 日後に収穫したほうれんそうの **6.72 mg/kg** であった。代謝物 B は、最終散布 3 及び 7 日後に収穫したマスタードグリーン の 0.04 mg/kg であったが、ほとんど定量限界未満であった。（参照 14、15、47、48、51、52、62、65、66）

【上路専門委員より】

海外栽培の代謝物 B について、別紙 4 のキャベツの残留値は正しいですか。確認してください。

【事務局より】

キャベツの代謝物 B の残留値は、最高値、平均値とも <0.01 mg/kg でありました。別紙 4 の該当箇所を訂正しました。

(2) 後作物残留試験

フルベンジアミドを 600 g ai/ha で 3 回散布して栽培したキャベツの後作物となるレタス及びだいこん（葉、根部）を用いて、フルベンジアミド、代謝物 B 及び C を分析対象化合物とした後作物残留試験が実施された。

結果は別紙 5 に示されており、いずれの作物でもフルベンジアミドは定量限界

1 未満であった。（参照 16）

3 **（3）推定摂取量**

4 別紙 3 の作物残留試験の分析値を用いて、フルベンジアミドを暴露評価対象物
5 質とした際に食品中から摂取される推定摂取量が表 15 に示されている。詳細は
6 別紙 6 に示されている。

7 なお、本推定摂取量の算定は、登録されている又は申請された使用方法からフ
8 ルベンジアミドが最大の残留を示す使用条件で、すべての適用作物に使用され、
9 加工・調理による残留農薬の増減が全くないとの仮定の下に行った。

11 **表 15 食品中より摂取されるフルベンジアミドの推定摂取量**

	国民平均 (体重:53.3 kg)	小児 (1~6 歳) (体重:15.8 kg)	妊婦 (体重:55.6 kg)	高齢者 (65 歳以上) (体重:54.2 kg)
摂取量 ($\mu\text{g}/\text{人}/\text{日}$)	352	158	287	411

13 **7. 一般薬理試験**

14 マウス及びラットを用いた一般薬理試験が実施された。結果は表 16 に示されて
15 いる。（参照 17）

16 **表 16 一般薬理試験概要**

試験の種類	動物種	動物数 匹/群	投与量* (mg/kg 体重)	最大 無作用量 (mg/kg 体重)	最小作用量 (mg/kg 体重)	結果の概要	
中枢神経系	一般状態 (Irwin 法)	ICR マウス	雌雄各 3	0、200、600、 2,000	2,000	—	投与による影響なし。
	一般状態 (FOB)	SD ラット	雄 5	0、200、600、 2,000	2,000	—	投与による影響なし。
	睡眠時間	ICR マウス	雄 8	0、200、600、 2,000	2,000	—	投与による影響なし。
循環器系	血圧・ 心拍数	SD ラット	雄 5	0、200、600、 2,000	2,000	—	投与による影響なし。
消化器系	小腸 輸送能	ICR マウス	雄 8	0、200、600、 2,000	600	2,000	炭末輸送能の抑制が認められた。
腎臓	腎機能	SD ラット	雄 5	0、200、600、 2,000	2,000	—	投与による影響なし。
血液	溶血と凝固	SD ラット	雄 5	0、200、600、 2,000	2,000	—	投与による影響なし。

17 *：いずれの試験においてもフルベンジアミド原体を 0.5%CMC-Na 水溶液に懸濁した検体を経口投与
18 した。

19 —：最小作用量は求められなかった。

1
2
3
4
5
6
7
8
9**8. 急性毒性試験****(1) 急性毒性試験**

フルベンジアミドの急性毒性試験が実施された。

結果は表 17 に示されている。なお、急性吸入毒性試験では 0.07 mg/L が暴露可能な最高濃度であった。（参照 18～20）

表 17 急性毒性試験結果概要（原体）

投与経路	動物種	LD ₅₀ (mg/kg 体重)		観察された症状
		雄	雌	
経口	SD ラット 雌雄各 5 匹	>2,000	>2,000	症状及び死亡例なし
経皮	SD ラット 雌雄各 5 匹	>2,000	>2,000	症状及び死亡例なし
吸入	SD ラット 雌雄各 5 匹	LC ₅₀ (mg/L)		症状及び死亡例なし
		>0.07	>0.07	

10
11
12
13
14
15

フルベンジアミドの代謝物 B 及び C の急性経口毒性試験が実施された。

結果は表 18 に示されている。代謝物 C において、投与 30 分後から軟便及び肛門周囲の被毛汚染がみられたが、投与 1 日後には消失した。（参照 21～22）

表 18 急性経口毒性試験結果概要（代謝物）

被験物質	動物種	LD ₅₀ (mg/kg 体重)		観察された症状
		雄	雌	
B	SD ラット 雌 6 匹	>2,000	>2,000	症状及び死亡例なし
C	SD ラット 雌 6 匹	>2,000	>2,000	軟便及び肛門周囲の被毛汚染 死亡例なし

16
17
18
19
20
21
22
23
24**(2) 急性神経毒性試験（ラット） [2003 年、GLP] <今回追加された試験>**

Fischer ラット（一群雌雄各 12 匹）を用いた強制経口（原体：0、200、700 及び 2,000 mg/kg 体重）投与による急性神経毒性試験が実施された。

本試験において、いずれの投与群でも検体投与に関連した影響は認められなかったため、無毒性量は雌雄とも 2,000 mg/kg 体重であると考えられた。急性神経毒性は認められなかった。（参照 62、67）

（農薬抄録：135～138 頁）

9. 眼・皮膚に対する刺激性及び皮膚感作性試験

日本白色種ウサギ（雄）を用いた眼刺激性試験及び皮膚刺激性試験が実施された。皮膚刺激性は認められなかったが、軽度の眼刺激性が認められた。（参照 23～24）

Hartley モルモット（雌）を用いた皮膚感作性試験（Maximization 法）が実施された。皮膚感作性は認められなかった。（参照 25）

10. 亜急性毒性試験

(1) 90 日間亜急性毒性試験（ラット）

Fischer ラット（一群雌雄各 10 匹）を用いた混餌（原体：0、20、50、200、2,000 及び 20,000 ppm：平均検体摂取量は表 19 参照）投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。

表 19 90 日間亜急性毒性試験（ラット）の平均検体摂取量

投与群		20 ppm	50 ppm	200 ppm	2,000 ppm	20,000 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	1.15	2.85	11.4	116	1,190
	雌	1.30	3.29	13.1	128	1,320

各投与群で認められた毒性所見は表 20 に示されている。

20,000 ppm 投与群の雌で散見された立ち上がり姿勢スコアの増加は、慢性毒性試験においてもほぼ同時期に観察されており、投与との関連は否定できないと判断したが、他の検査項目の変化を伴わないこの所見単独での軽微かつ一時的な変化について毒性学的意義を認めることは難しいと考えられた。

本試験において、2,000 ppm 以上投与群の雄で PLT 増加が、200 ppm 以上投与群の雌で小葉周辺性肝細胞脂肪化等が認められたので、無毒性量は雄で 200 ppm (11.4 mg/kg 体重/日)、雌で 50 ppm (3.29 mg/kg 体重/日) であると考えられた。（参照 26）

表 20 90 日間亜急性毒性試験（ラット）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
20,000 ppm	<ul style="list-style-type: none"> ・ MCV 減少 ・ TP 及び Alb 増加 ・ 肝絶対及び比重量⁴増加 ・ 肝暗調化及び腫大 	<ul style="list-style-type: none"> ・ MCH 減少 ・ TP 及び Alb 増加 ・ Glob 増加、T.Chol 及び TBA 減少 ・ 副腎、卵巣絶対及び比重量増加 ・ 肝暗調化
2,000 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> ・ PLT 増加 	<ul style="list-style-type: none"> ・ PLT 増加、Ht 及び Hb 減少 ・ GGT 及びカリウム増加、TG 減少、ChE 活性低下

⁴ 体重比重量を比重量という（以下同じ）。

		<ul style="list-style-type: none"> 腎絶対及び比重量増加 肝腫大 び慢性肝細胞肥大 甲状腺ろ胞上皮細胞肥大
200 ppm 以上	200 ppm 以下毒性所見なし	<ul style="list-style-type: none"> MCV 減少 肝絶対及び比重量増加 小葉周辺性肝細胞脂肪化
50 ppm 以下		毒性所見なし

1

2

(2) 90 日間亜急性毒性試験（マウス）

3

4

5

6

7

8

ICR マウス（一群雌雄各 10 匹）を用いた混餌（原体：0、50、100、1,000 及び 10,000 ppm：平均検体摂取量は表 21 参照）投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。なお、本試験は発がん性試験（マウス）の予備試験であり、試験ガイドラインには準拠していない。

表 21 90 日間亜急性毒性試験（マウス）の平均検体摂取量

投与群		50 ppm	100 ppm	1,000 ppm	10,000 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	6.01	11.9	123	1,210
	雌	7.13	14.7	145	1,420

9

10

各投与群で認められた毒性所見は表 22 に示されている。

11

12

13

14

15

本試験において、1,000 ppm 投与群以上の雌雄で小葉中心性肝細胞肥大等が認められたので、無毒性量は雌雄とも 100 ppm（雄：11.9 mg/kg 体重/日、雌：14.7 mg/kg 体重/日）であると考えられた。（参照 43）

表 22 90 日間亜急性毒性試験（マウス）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
10,000 ppm	<ul style="list-style-type: none"> 肝比重量増加 肝暗調化 	<ul style="list-style-type: none"> T.Bil 増加 卵巣比重量増加
1,000 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> 小葉中心性肝細胞肥大 小葉中心性肝細胞脂肪化 	<ul style="list-style-type: none"> 肝絶対及び比重量増加 小葉中心性肝細胞肥大 小葉中心性肝細胞脂肪化
100 ppm 以下	毒性所見なし	毒性所見なし

16

17

(3) 90 日間亜急性毒性試験（イヌ）

18

19

20

21

ビーグル犬（一群雌雄各 4 匹）を用いた混餌（原体：0、100、2,000、40,000 ppm：平均検体摂取量は表 23 参照）投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。

1 表 23 90 日間亜急性毒性試験（イヌ）の平均検体摂取量

投与群		100 ppm	2,000 ppm	40,000 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	2.58	52.7	1,080
	雌	2.82	59.7	1,140

2
3 各投与群で認められた毒性所見は表 24 に示されている。

4 40,000 ppm 投与群の雄でみられた軟便は検体投与の影響によるものと考えら
5 れたが、40,000 ppm 投与群の雌を含めた他の投与群でみられた軟便は、発生個
6 体数が少なく、また、観察された週も少なかったことから、検体投与には関連し
7 ない症状であると考えられた。

8 40,000 ppm 投与群の雄の 2 例に肝臓の小肉芽腫が認められたが、この病変の
9 程度は軽く、また、雌では用量に関連なく観察された所見であったため、検体投
10 与とは関連しないものと考えられた。

11 本試験において、2,000 ppm 以上投与群の雌雄で副腎絶対及び比重量増加等が
12 認められたので、無毒性量は雌雄とも 100 ppm（雄：2.58 mg/kg 体重/日、雌：
13 2.82 mg/kg 体重/日）であると考えられた。（参照 27）

14 表 24 90 日間亜急性毒性試験（イヌ）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
40,000 ppm	<ul style="list-style-type: none"> ・ 軟便 ・ 体重増加抑制 ・ Hb 及び RBC 増加 ・ ALP 増加、T.Chol 減少 ・ 副腎皮質細胞肥大 	
2,000 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> ・ APTT 短縮 ・ 副腎絶対及び比重量増加 	<ul style="list-style-type: none"> ・ APTT 短縮 ・ ALP 及び TG 増加 ・ 副腎絶対及び比重量増加 ・ 副腎皮質細胞肥大
100 ppm	毒性所見なし	毒性所見なし

16
17 **1 1. 慢性毒性試験及び発がん性試験**

18 **(1) 1 年間慢性毒性試験（ラット）**

19 Fischer ラット（一群雌雄各 25 匹）を用いた混餌（原体：0、20、50、2,000、
20 20,000 ppm：平均検体摂取量は表 25 参照）投与による 1 年間慢性毒性試験が実
21 施された。

22 表 25 1 年間慢性毒性試験（ラット）の平均検体摂取量

投与群		20 ppm	50 ppm	2,000 ppm	20,000 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	0.781	1.95	79.3	822
	雌	0.960	2.40	97.5	998

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11

各投与群で認められた毒性所見は表 26 に示されている。

20,000 ppm 投与群の雌で散見された立ち上がり姿勢スコアの増加は、亜急性毒性試験においてもほぼ同時期に観察されており投与との関連は否定できないと判断したが、他の検査項目の変化を伴わないこの所見単独での軽微かつ一時的な変化について毒性学的意義を認めることは難しいと考えられた。

本試験において、2,000 ppm 以上投与群の雌雄で甲状腺ろ胞上皮細胞肥大等が認められたので、無毒性量は雌雄とも 50 ppm（雄：1.95 mg/kg 体重/日、雌：2.40 mg/kg 体重/日）であると考えられた。（参照 28）

表 26 1 年間慢性毒性試験（ラット）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
20,000 ppm	<ul style="list-style-type: none"> ・ Ht、Hb、RBC、MCV 及び MCH 減少、PLT 増加 ・ TP 増加 ・ 甲状腺絶対及び比重量増加 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 卵巣絶対及び比重量増加
2,000 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> ・ 網状赤血球数増加、PT 及び APTT 延長 ・ GGT 及び Alb 増加 ・ 肝比重量増加 ・ 甲状腺ろ胞上皮細胞肥大 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Ht、Hb、RBC、MCV 及び MCH 減少 ・ GGT、TP、Alb 及びリン増加、TBA、T.Chol 及び TG 減少 ・ 肝、腎及び心絶対及び比重量増加 ・ 副腎比重量増加 ・ 脾絶対及び比重量減少 ・ 肝暗調化及び腫大 ・ 甲状腺ろ胞上皮細胞肥大 ・ 小葉周辺性肝細胞脂肪化及びび慢性肝細胞肥大
50 ppm 以下	毒性所見なし	毒性所見なし

12
13
14
15
16
17

（2）1 年間慢性毒性試験（イヌ）

ビーグル犬（一群雌雄各 4 匹）を用いた混餌（原体：0、100、1,500、20,000 ppm：平均検体摂取量は表 27 参照）投与による 1 年間慢性毒性試験が実施された。

表 27 1 年間慢性毒性試験（イヌ）の平均検体摂取量

投与群		100 ppm	1,500 ppm	20,000 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	2.21	35.2	484
	雌	2.51	37.9	533

18
19
20

各投与群で認められた毒性所見は表 28 に示されている。

本試験において、1,500 ppm 以上投与群の雄で肝比重量増加等、雌で ALP 増

1 加等が認められたので、無毒性量は雌雄とも 100 ppm（雄：2.21 mg/kg 体重/日、
2 雌：2.51 mg/kg 体重/日）であると考えられた。（参照 29）

3
4 表 28 1 年間慢性毒性試験（イヌ）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
20,000 ppm	<ul style="list-style-type: none"> ALP 及び ALT 増加、Alb 及び A/G 比減少 肝クッパー細胞褐色色素沈着 	<ul style="list-style-type: none"> 体重増加抑制 ALT、GGT 及び TG 増加、Glu 減少 肝絶対重量増加 肝クッパー細胞褐色色素沈着
1,500 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> 体重増加抑制 APTT 短縮 ナトリウム減少 肝比重量増加 	<ul style="list-style-type: none"> APTT 短縮、PLT 増加 ALP 増加
100 ppm	毒性所見なし	毒性所見なし

5
6 (3) 2 年間発がん性試験（ラット）

7 Fischer ラット（一群雌雄各 50 匹）を用いた混餌（原体：0、50、1,000、20,000
8 ppm：平均検体摂取量は表 29 参照）投与による 2 年間発がん性試験が実施され
9 た。

10
11 表 29 2 年間発がん性試験（ラット）の平均検体摂取量

投与群		50 ppm	1,000 ppm	20,000 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	1.70	33.9	705
	雌	2.15	43.7	912

12 各投与群で認められた毒性所見は表 30 に示されている。

13 腫瘍性病変において、対照群と投与群の間に発生頻度の有意な差は認められな
14 かった。

15 本試験において、1,000 ppm 以上投与群の雌雄で小葉周辺性肝細胞脂肪化等が
16 認められたので、無毒性量は雌雄で 50 ppm（雄：1.70 mg/kg 体重/日、雌：2.15
17 mg/kg 体重/日）であると考えられた。発がん性は認められなかった。（参照 30）
18
19

20 表 30 2 年間発がん性試験（ラット）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
20,000 ppm	<ul style="list-style-type: none"> 肝絶対及び比重量増加 甲状腺絶対重量増加 肝小葉明瞭及び表面粗造 脾暗調化 甲状腺ろ胞上皮細胞肥大 	<ul style="list-style-type: none"> 体重増加抑制 甲状腺、副腎及び卵巣絶対及び比重量増加
1,000 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> 小葉周辺性肝細胞脂肪化 慢性腎症 	<ul style="list-style-type: none"> 肝絶対及び比重量増加 腎比重量増加

		<ul style="list-style-type: none"> ・肝暗調化及び腫大 ・脱毛 ・小葉周辺性肝細胞脂肪化、び慢性肝細胞脂肪化及びび慢性肝細胞肥大 ・慢性腎症 ・甲状腺ろ胞上皮細胞肥大 ・皮膚毛包炎又は毛嚢炎
50 ppm	毒性所見なし	毒性所見なし

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17

(4) 18 か月間発がん性試験（マウス）

ICR マウス（一群雌雄各 52 匹）を用いた混餌（原体：0、50、1,000 及び 10,000 ppm：平均検体摂取量は表 31 参照）投与による 18 か月間発がん性試験が実施された。

表 31 18 か月間発がん性試験（マウス）の平均検体摂取量

投与群		50 ppm	1,000 ppm	10,000 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	4.85	94	988
	雌	4.44	93	937

各投与群で認められた毒性所見は表 32 に示されている。

腫瘍性病変において、対照群と投与群の間に発生頻度の有意な差は認められなかった。

本試験において、1,000 ppm 以上投与群の雌雄で甲状腺ろ胞上皮細胞肥大等が認められたので、無毒性量は雌雄ともに 50 ppm（雄：4.85 mg/kg 体重/日、雌：4.44 mg/kg 体重/日）であると考えられた。発がん性は認められなかった。（参照 31）

表 32 18 か月間発がん性試験（マウス）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
10,000 ppm	<ul style="list-style-type: none"> ・肝、甲状腺及び副腎絶対及び比重量増加 ・甲状腺コロイド変性 ・変異肝細胞巣（空胞細胞及び好塩基性細胞） 	<ul style="list-style-type: none"> ・甲状腺絶対及び比重量増加 ・肝暗調化 ・小葉周辺性肝細胞脂肪化（大型脂肪滴） ・甲状腺コロイド変性及びろ胞上皮過形成
1,000 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> ・肝暗調化 ・甲状腺腫大 ・小葉中心性肝細胞肥大、小葉中心性肝細胞脂肪化及びび慢性肝細胞脂肪化（小型脂肪滴） ・甲状腺水腫様変性を伴うろ胞上皮細 	<ul style="list-style-type: none"> ・肝絶対及び比重量増加 ・甲状腺腫大 ・小葉中心性肝細胞肥大、小葉中心性肝細胞脂肪化及びび慢性肝細胞脂肪化（小型脂肪滴） ・び慢性肝細胞脂肪化（大型脂肪滴）

	胞肥大及び大型ろ胞増加	・甲状腺水腫様変性を伴うろ胞上皮細胞肥大及び大型ろ胞増加
50 ppm	毒性所見なし	毒性所見なし

1

2 **12. 生殖発生毒性試験**3 **(1) 2 世代繁殖試験（ラット）**

4 Wistar ラット（一群雌雄各 24 匹）を用いた混餌（原体：0、20、50、2,000
5 及び 20,000 ppm：平均検体摂取量は表 33 参照）投与による 2 世代繁殖試験が
6 実施された。

7

8

表 33 2 世代繁殖試験（ラット）の平均検体摂取量

投与群		20 ppm	50 ppm	2,000 ppm	20,000 ppm	
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	P 世代	雄	1.30	3.30	131	1,310
		雌	1.59	3.95	159	1,580
	F ₁ 世代	雄	1.64	4.05	162	1,640
		雌	1.84	4.59	176	1,810

9

10 各投与群で認められた毒性所見は表 34 に示されている。

11 親動物において、2,000 及び 20,000 ppm 投与群の P 世代雌各 1 例が出産時に
12 臨床症状を示すことなく死亡した。このうち 20,000 ppm 投与群の 1 例では、重
13 度の肝細胞脂肪化及び塊状肝細胞壊死が認められたので、肝臓障害が死亡に至ら
14 せる要因の一つであったと考えられた。なお、追加実施された 1 世代繁殖試験
15 [13. (2)] の 20,000 ppm 投与群においても出産時死亡が認められたことから、
16 20,000 ppm 投与群における死亡は検体投与に関連すると考えられたが、2,000
17 ppm 投与群での死亡は本試験のみで認められ、偶発的なものである可能性が高い
18 と考えられた。

19 2,000 ppm 以上投与群の F₁ 及び F₂ 世代児動物で腫大が認められた眼球では、
20 ほぼ全例に虹彩癒着が認められ、眼房水の流出阻害が眼球腫大に至ったと考えら
21 れた。また、これらの眼球では出血、角膜上皮基底細胞の水腫様変性、角膜上皮
22 細胞の空胞化、角膜炎、虹彩炎及び白内障も観察された。

23 F₁ 世代児動物の雄において、50 ppm 以上投与群で包皮分離完了の遅延がみら
24 れ、対照群との間に有意差が認められた。しかし、50 及び 2,000 ppm 投与群の
25 平均完了日（42.5 及び 43.0 日）は試験施設における同系統ラットの背景データ
26 （40.9～43.4 日）の範囲内にあり、多重比較検定で解析した場合、平均完了日の
27 有意な遅延は 2,000 ppm 以上投与群で認められ、50 ppm 投与群に有意差はなか
28 った。また、追加実施された 1 世代繁殖試験においても、200 ppm 以下の投与群
29 では包皮分離完了日に変動はみられなかったことから、50 ppm 投与群でみられ
30 た包皮分離完了の遅延は偶発的であると考えられた。

1 本試験において、親動物では 2,000 ppm 以上投与群の雌雄で甲状腺ろ胞上皮細
 2 胞肥大等が、児動物では 2,000 ppm 以上投与群の雌雄で肝絶対及び比重量増加
 3 等が認められたので、無毒性量は親動物及び児動物の雌雄で 50 ppm (P 雄 : 3.30
 4 mg/kg 体重/日、P 雌 : 3.95 mg/kg 体重/日、F₁ 雄 : 4.05 mg/kg 体重/日、F₁ 雌 :
 5 4.59 mg/kg 体重/日) であると考えられた。繁殖能に対する影響は認められな
 6 かった。(参照 32)

7 (包皮分離完了遅延の検討については [13. (2)]、眼球腫大の検討については
 8 [15. (3)] を参照)

9
 10 表 34 2 世代繁殖試験（ラット）で認められた毒性所見

	投与群	親 : P、児 : F ₁		親 : F ₁ 、児 : F ₂	
		雄	雌	雄	雌
親動物	20,000 ppm	<ul style="list-style-type: none"> ・甲状腺腫大及び褐色化 ・肝及び甲状腺絶対及び比重量増加 ・副腎絶対重量増加 	<ul style="list-style-type: none"> ・甲状腺腫大 ・肝胆管増生及び多核肝細胞 ・副腎び慢性皮質細胞肥大 ・卵巣間質細胞の空洞化 	<ul style="list-style-type: none"> ・甲状腺腫大及び褐色化 ・肝及び甲状腺絶対及び比重量増加 ・肝細胞脂肪化及び肝細胞肥大 ・精細胞数減少 	<ul style="list-style-type: none"> ・甲状腺腫大 ・子宮絶対重量増加 ・肝胆管増生
	2,000 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> ・甲状腺ろ胞上皮細胞肥大 	<ul style="list-style-type: none"> ・肝腫大及び暗調化 ・甲状腺褐色化 ・肝、甲状腺、腎及び子宮絶対及び比重量増加 ・副腎及び卵巣絶対重量増加 ・脾比重量減少 ・肝細胞脂肪化、肝細胞肥大及び肝褐色色素沈着 ・甲状腺ろ胞上皮細胞肥大 ・腎尿細管好塩基性化及び尿円柱 	<ul style="list-style-type: none"> ・下垂体比重量減少 ・肝褐色色素沈着 ・甲状腺ろ胞上皮細胞肥大 ・包皮分離完了遅延 	<ul style="list-style-type: none"> ・肝腫大及び暗調化 ・甲状腺褐色化 ・肝、甲状腺及び腎絶対及び比重量増加 ・脾絶対及び比重量減少 ・下垂体比重量減少 ・肝細胞脂肪化、肝細胞肥大及び肝褐色色素沈着 ・甲状腺ろ胞上皮細胞肥大
	50 ppm 以下	毒性所見なし	毒性所見なし	毒性所見なし	毒性所見なし
児動物	20,000 ppm	<ul style="list-style-type: none"> ・体重増加抑制 ・甲状腺比重量増加 ・肝胆管増生 	<ul style="list-style-type: none"> ・体重増加抑制 ・胸腺絶対重量減少 	<ul style="list-style-type: none"> ・体重増加抑制 ・胸腺絶対重量減少 ・肝胆管増生 	<ul style="list-style-type: none"> ・体重増加抑制
	2,000 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> ・肝暗調化 ・眼球腫大 ・肝絶対及び比重量増加 ・脾及び胸腺絶対及び比重量減少 ・肝細胞脂肪化、肝細胞肥大及び肝褐色色素沈着 	<ul style="list-style-type: none"> ・肝暗調化 ・眼球腫大 ・肝絶対及び比重量増加 ・子宮比重量増加 ・脾比重量減少 ・肝細胞脂肪化、肝細胞肥大、肝褐色色素沈着及び胆管増生 	<ul style="list-style-type: none"> ・肝暗調化 ・眼球腫大 ・肝絶対及び比重量増加 ・脾比重量減少 ・肝細胞脂肪化、肝細胞肥大及び肝褐色色素沈着 ・甲状腺ろ胞上皮細胞 	<ul style="list-style-type: none"> ・肝暗調化 ・眼球腫大 ・肝絶対及び比重量増加 ・脾及び胸腺絶対及び比重量減少 ・肝細胞脂肪化、肝細胞肥大、肝褐色色素沈着及び胆管増生

		・甲状腺ろ胞上皮細胞 肥大	・甲状腺ろ胞上皮細胞 肥大	肥大	・甲状腺ろ胞上皮細胞 肥大
50 ppm 以下		毒性所見なし	毒性所見なし	毒性所見なし	毒性所見なし

1

2 (2) 1 世代繁殖試験（ラット）＜追加試験＞

3 先に実施された 2 世代繁殖試験 [13. (1)] において、50 ppm 以上投与群の F₁
4 児動物雄で認められた包皮分離完了の遅延を再確認するため、Wistar ラット（一
5 群雌雄各 24 匹）を用いた混餌（原体：0、50、200、2,000 及び 20,000 ppm：
6 平均検体摂取量は表 35 参照）投与による 1 世代繁殖試験が実施された。F₁ 世代
7 親動物に関しては、雄で離乳後約 10 週間、雌で離乳後約 5 週間を試験期間とし
8 た。

9

10

表 35 1 世代繁殖試験（ラット）の平均検体摂取量

投与群		50 ppm	200 ppm	2,000 ppm	20,000 ppm	
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	P 世代	雄	3.25	12.9	127	1,290
		雌	3.84	15.0	149	1,490
	F ₁ 世代	雄	4.05	15.9	160	1,610
		雌	5.28	21.0	206	2,090

11

12 各投与群で認められた毒性所見は表 36 に示されている。

13 2,000 ppm 以上投与群の F₁ 雄動物において包皮分離完了の遅延が認められた
14 が、同世代雄動物で測定した肛門生殖突起間距離（AGD）の短縮がなく、むしろ
15 これらの群では大きい値を示しており、少なくとも検体が抗アンドロゲン作用に
16 よって性成熟を遅延させているのではないと考えられた。

17 本試験において、親動物では 2,000 ppm 以上投与群の雄で包皮分離完了遅延等、
18 200 ppm 以上投与群の雌で腎絶対及び比重量増加等が認められ、児動物では
19 2,000 ppm 以上投与群の雌雄で肝絶対及び比重量増加等が認められたので、無毒
20 性量は親動物の雄で 200 ppm（P 雄：12.9 mg/kg 体重/日、F₁ 雄：15.9 mg/kg
21 体重/日）、雌で 50 ppm（P 雌：3.84 mg/kg 体重/日、F₁ 雌：5.28 mg/kg 体重/
22 日）、児動物で 200 ppm（F₁ 雄：12.9 mg/kg 体重/日、F₁ 雌：15.0 mg/kg 体重/
23 日）であると考えられた。繁殖能に対する影響は認められなかった。（参照 33）

24

25

26

27

28

29

1 表 36 1 世代繁殖試験（ラット）で認められた毒性所見

投与群	親：P、児：F ₁		親：F ₁		
	雄	雌	雄	雌	
親動物	20,000 ppm	・甲状腺腫大及び褐色化 ・肝絶対及び比重量増加	・甲状腺絶対及び比重量増加	・肝暗調化 ・甲状腺褐色化 ・肝絶対及び比重量増加	・肝腫大 ・甲状腺比重量増加
	2,000 ppm 以上	2,000 ppm 以下 毒性所見なし	・肝腫大 ・甲状腺褐色化 ・肝絶対及び比重量増加 ・腎、卵巣及び子宮絶対重量増加	・下垂体絶対及び比重量減少 ・包皮分離完了遅延	・肝暗調化 ・肝及び卵巣絶対及び比重量増加
	200 ppm 以上		・肝暗調化	200 ppm 以下 毒性所見なし	・腎絶対及び比重量増加 ・下垂体絶対及び比重量減少
	50 ppm		毒性所見なし		毒性所見なし
児動物	20,000 ppm	・眼球腫大 ・体重増加抑制 ・胸腺絶対重量減少	・眼球腫大 ・体重増加抑制 ・甲状腺絶対重量減少		
	2,000 ppm 以上	・肛門生殖突起間距離増加 ・肝暗調化 ・肝絶対及び比重量増加 ・脾絶対及び比重量減少 ・甲状腺絶対重量減少	・肝暗調化 ・肝絶対及び比重量増加 ・脾及び胸腺絶対及び比重量減少		
	200 ppm 以下	毒性所見なし	毒性所見なし		

2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13

(3) 発生毒性試験（ラット）

Wistar ラット（一群雌 24 匹）の妊娠 6～19 日に強制経口（原体：0、10、100 及び 1,000 mg/kg 体重/日、溶媒：1%CMC）投与して発生毒性試験が実施された。

母動物では、100 mg/kg 体重/日以上投与群で肝絶対及び比重量増加が認められた。

胎児には、検体投与の影響は認められなかった。

本試験において、母動物の 100 mg/kg 以上投与群で肝絶対及び比重量増加が認められ、胎児では毒性所見は認められなかったため、無毒性量は母動物で 10 mg/kg 体重/日、胎児で本試験の最高用量 1,000 mg/kg 体重/日であると考えられた。催奇形性は認められなかった。（参照 34）

1 (4) 発生毒性試験（ウサギ）

2 日本白色種ウサギ（一群雌 25 匹）の妊娠 6～27 日に強制経口（原体：0、20、
3 100 及び 1,000 mg/kg 体重/日、溶媒：1%CMC）投与して発生毒性試験が実施さ
4 れた。

5 母動物では、1,000 mg/kg 体重/日投与群において、妊娠末期に摂餌量減少及び軟
6 便が認められた。

7 胎児には、検体投与の影響は認められなかった。

8 本試験において、母動物の 1,000 mg/kg 体重/日投与群で摂餌量減少等が認め
9 られ、胎児では毒性所見は認められなかったので、無毒性量は母動物で 100
10 mg/kg 体重/日、胎児で本試験の最高用量 1,000 mg/kg 体重/日であると考えられ
11 た。催奇形性は認められなかった。（参照 35）

13 (5) 発達神経毒性試験（ラット）

14 Wistar ラット（一群雌 30 匹）の妊娠 6 日～哺育 21 日に混餌（原体：0、120、
15 1,200 及び 12,000 ppm：平均検体摂取量はそれぞれ 0、9.9、99.5 及び 980 mg/kg
16 体重/日）投与して発達神経毒性試験が実施された。

17 各投与群で認められた毒性所見は表 37 に示されている。

18 12,000 ppm 投与群の雄で水迷路検査における所要時間の高値（17.3 秒）がみ
19 られたが、対照群との差は僅かであり、雌で同様な変化はなく、さらに背景デー
20 タ（11.3～21.4 秒）の範囲内であったことから、検体投与とは関係しないと考え
21 られた。神経病理組織学的検査では、検体投与に関連する変化はみられなかった。

22 本試験において、母動物では 1,200 ppm 以上投与群で小葉中心性肝細胞肥大等、
23 児動物では 1,200 ppm 以上投与群で包皮分離発現日遅延等が認められたので、
24 無毒性量は母動物及び児動物で 120 ppm（9.9 mg/kg 体重/日）であると考えられ
25 た。発達神経毒性は認められなかった。（参照 55）

27 表 37 発達神経毒性試験（ラット）で認められた毒性所見

投与群	母動物	児動物
12,000 ppm		<ul style="list-style-type: none"> • 眼の異常¹⁾（眼赤色化、眼球腫大、角膜混濁、眼球突出、虹彩腫大、対光反射の消失、網膜変性、角膜炎、鉍質沈着、虹彩前癒着、ブドウ膜炎、白内障及び視神経の萎縮） • 膣開口発現日遅延
1,200 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> • 肝絶対及び比重量増加 • 小葉中心性肝細胞肥大 	<ul style="list-style-type: none"> • 体重増加抑制²⁾ • 包皮分離発現日遅延
120 ppm	毒性所見なし	毒性所見なし

28 1)：眼の異常については、発生頻度に有意差のない所見もあったが、いずれも検体投与に関連した変
29 化と考えられた。

30 2)：1,200 ppm については有意差がみられなかったが、検体投与に関連した変化と考えられた。

1 **1 3. 遺伝毒性試験<一部今回追加された試験>**

2 フルベンジアミドの細菌を用いた復帰突然変異試験、チャイニーズハムスター
 3 肺由来 (V79) 細胞を用いた遺伝子突然変異試験、チャイニーズハムスター肺由来
 4 (CHL) 細胞を用いた染色体異常試験及びマウスを用いた小核試験が実施された。
 5 試験結果は表 38 に示されているとおり、すべて陰性であった。フルベンジアミ
 6 ドに遺伝毒性はないものと考えられた。(参照 36~38、62、68、69)
 7 (農薬抄録：267~269、274、275 頁)

8
9 **表 38 遺伝毒性試験結果概要（原体）**

試験	対象	処理濃度・投与量	結果
<i>in vitro</i>	復帰突然変異試験 <i>Salmonella typhimurium</i> (TA98, TA100, TA1535, TA1537 株) <i>Escherichia coli</i> (WP2uvrA 株)	1.22~5,000 µg/プレート (+/-S9)	陰性
	遺伝子突然変異試験 チャイニーズハムスター肺由来 (V79) 細胞 (Hprt 遺伝子座) [2003 年 GLP]	7.5~240 µg/mL (+/-S9)	陰性
	染色体異常試験 チャイニーズハムスター肺由来 (CHL) 継代培養細胞	125~2,200 µg/mL (-S9) 550~2,200 µg/mL (+S9)	陰性
<i>in vivo</i>	小核試験 ICR マウス (骨髄細胞) (一群雌雄各 5 匹)	500, 1,000, 2,000 mg/kg 体重 (強制単回経口投与)	陰性
	NMRI マウス (骨髄細胞) (一群雄各 5 匹) [2005 年、GLP]	1,000, 2,000, 4,000 mg/kg 体重 (1 日 1 回、24 時間間隔で 2 回連続腹腔内投与)	陰性

10 注) +/-S9：代謝活性化系存在下及び非存在下

11
12 代謝物 B 及び C の細菌を用いた復帰突然変異試験が実施された。結果は表 39
13 に示されているとおり、すべて陰性であった。(参照 39、40)

14
15 **表 39 遺伝毒性試験結果概要（代謝物）**

被験物質	試験	対象	処理濃度・投与量	結果
代謝物 B	復帰突然変異試験	<i>S. typhimurium</i> (TA98, TA100, TA1535, TA1537 株) <i>E. coli</i> (WP2uvrA 株)	1.22~5,000 µg/プレート (+/-S9)	陰性
代謝物 C	復帰突然変異試験	<i>S. typhimurium</i> (TA98, TA100, TA1535, TA1537 株) <i>E. coli</i> (WP2uvrA 株)	1.22~5,000 µg/プレート (+/-S9)	陰性

16 注) +/-S9：代謝活性化系存在下及び非存在下

1 14. その他の試験

2 (1) ラットの甲状腺関連ホルモン濃度及び肝薬物代謝酵素に対する影響

3 反復経口投与による各種毒性試験 [11. ~13.] において、検体投与による甲状
4 腺への影響が認められたため、Fischer ラット（一群雌 20 匹）に混餌（原体：0、
5 1,000 及び 10,000 ppm：平均検体摂取量はそれぞれ 0、83 及び 812 mg/kg 体重
6 /日に相当）投与し、甲状腺関連ホルモン濃度及び肝薬物代謝酵素に対するフルベ
7 ンジアミドの影響について検討された。なお、各群 20 匹のラットを 10 匹ずつの
8 サブグループ A 及び B に分け、A には 28 日間、B には 7 日間投与した。

9 検体投与により UDPGT 活性の誘導が認められた。これは T₄代謝の亢進による
10 血中甲状腺ホルモンの代謝亢進を示唆するが、同酵素の誘導剤で認められるべ
11 き血清 T₄及び T₃濃度の減少を伴わずに TSH 濃度が増加していたことから、甲
12 状腺への影響は肝臓の酵素誘導によるフィードバックメカニズムだけでは十分
13 に説明できないと考えられた。（参照 42）

14

15 (2) *in vitro*におけるヨードサイロニン脱ヨード酵素 type1 に対する影響

16 反復経口投与による各種毒性試験 [11. ~13.] において、検体投与による甲状
17 腺への影響が認められたため、Wistar ラット雄 2 匹の肝臓を用いて、甲状腺ホ
18 ルモン代謝、特に T₄から T₃への活性化酵素であるヨードサイロニン脱ヨード酵
19 素 type1 に対するフルベンジアミドの影響について検討された。

20 試験の結果、添加可能最大濃度である 100 µM に至るまでヨードサイロニン脱
21 ヨード酵素 type1 の活性に影響を及ぼさなかったことから、フルベンジアミドは
22 この酵素の阻害を通じて甲状腺ホルモンの恒常性維持に影響を及ぼすことはな
23 いことが示唆された。（参照 42）

24

25 (3) 1 世代繁殖試験における児動物の眼球の病理組織学的検査

26 ラットを用いた 2 世代繁殖試験 [13. (1)] 及び 1 世代繁殖試験 [13. (2)] にお
27 いて F₁ 児動物で認められた眼球腫大の詳細を検討するため、1 世代繁殖試験の
28 F₁ 児動物を対象として、異常所見のある眼球について病理組織学的検査が実施さ
29 れた。さらに、その前駆病変の有無を検索するため、肉眼的異常が認められな
30 かった眼球についても検査が実施された。

31 2,000 及び 20,000 ppm 投与群で眼球に肉眼的異常を示した離乳児では、虹彩
32 癒着、出血、角膜炎、虹彩炎、白内障、角膜上皮基底細胞の水腫様変性及び角膜
33 上皮空胞化という種々の組織学的変化が認められ、虹彩癒着による眼房水の排泄
34 障害による眼圧増加が眼球腫大の原因である可能性が考えられた。肉眼的異常の
35 ない離乳児の眼球では検体の投与に関連した影響はみられず、1 世代繁殖試験に
36 における眼球への影響に関する無毒性量は 200 ppm であると考えられた。（参照
37 42）

38

1 **（４）周産期混餌投与による眼発達に対する影響（マウス） [2006 年、GLP] <今回追加された試験>**

2
3 ICR マウス（対照群：雌 25 匹、投与群：雌 28 匹）の妊娠 6 日～哺育 21 日に
4 混餌（原体：0、2,000 ppm 及び 4,500 ppm（妊娠 6 日～哺育 3 日）及び 2,000 ppm（哺
5 育 3 日～21 日）：平均検体摂取量 1,000 mg/kg 体重/日）投与して出生児の眼発達
6 に対する影響が検討された。投与量については、平均検体摂取量が 1,000 mg/kg
7 体重/日となるように、妊娠 6 日～哺育 3 日の混餌濃度は 4,500 ppm、哺育 3 日
8 ～21 日では 2,000 ppm の混餌濃度を含有する試験飼料を自由に摂取させた。事

9 **事務局修正**

10 母動物では、一般状態、体重変化及び繁殖能等への影響は認められなかった。
11 F₁ 児動物において、哺育 7 日以降の体重及び体重増加量が軽度な低値を示した
12 が、眼の異常は観察されず、他の一般状態、産児数及び生存率等への影響も認め
13 られなかった。

14 本試験において、フルベンジアミドの限界用量である 1,000 mg/kg 体重/日の
15 周産期混餌投与において出生児の眼発達に対する影響は認められなかった。（参
16 照 62、70）

17 （農薬抄録：303～307 頁）

18 **【納屋専門委員より】**

P39、27-30 行の投与量の記載はわかりづらいので、抄録 P303 の記載を参考に修正してくだ
さい。なお、抄録中に検体摂取量の根拠が欠落していますので、幹事会当日までに確認をし
てください。

【事務局より】

投与量の記載箇所について、上記のとおり修正しました。

【吉田専門委員より】

妊娠 6 日から哺育 21 日は周産期ですか？

19
20 **（５）肝ミクロソーム画分による *in vitro* 代謝試験**

21 フルベンジアミドの哺乳動物代謝における種差及び性差の原因を明らかにす
22 る目的で、雌雄の Fischer ラット、ICR マウス、ビーグル犬及びヒト（10 ドナ
23 ー混合）の肝臓より調製したミクロソーム画分を用いた *in vitro* 代謝試験が実施
24 された。

25 ラットの場合、雄由来ミクロソームはフルベンジアミドの代謝物 E への顕著な
26 水酸化活性を示したが、雌由来ミクロソームには同活性は認められなかった。

27 一方、ラットを除く他動物（マウス、イヌ及びヒト）由来のミクロソームの場
28 合、雌雄で同程度のフルベンジアミド水酸化活性を示した。（参照 42）

29
30 **（６）28 日間免疫毒性試験（ラット） [2005 年、GLP] <今回追加された試験>**

31 Wistar ラット（一群雌雄各 10 匹）を用いて、混餌（原体：0、40、400 及び

1 4,000 ppm：平均検体摂取量は表 40 参照）投与による 28 日間免疫毒性試験が実
2 施された。

3
4 表 40 28 日間免疫毒性試験（ラット）の平均検体摂取量

投与群		40 ppm	400 ppm	4,000 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	3.34	33.6	336
	雌	4.00	38.4	359

5
6 4,000 ppm 投与群の雄で ALT、AST 減少、同投与群の雌で RBC、ALT 減少
7 並びに甲状腺絶対及び比重量増加が認められ、400 ppm 以上投与群の雌で Hb 及
8 び Ht 減少並びに肝絶対及び比重量増加が認められた。

9 免疫学的検査においては FACS によるサブセット解析にて、4,000 ppm 投与
10 群の雌雄で CD45^{total} 及び CD45^{high} 陽性脾臓細胞数の低下とそれに関連した
11 CD45^{low} 陽性脾臓細胞数の増加が認められ、同群雌では IgA 減少が認められた
12 吉田専門委員修文。

13 本試験において、4,000 ppm 投与群の雄で ALT 及び AST の減少が、雌では
14 400 ppm 以上投与群で Hb 及び Ht の減少等が認められたので、一般毒性に対す
15 る無毒性量は、雄で 400 ppm（33.6 mg/kg 体重/日）、雌で 40 ppm（4.00 mg/kg
16 体重/日）であり、また、4,000 ppm 投与群の雌雄で CD45^{total} 及び CD45^{high} 陽性
17 脾臓細胞数の低下等が認められたので、免疫毒性に対する無毒性量は雌雄とも
18 400 ppm（雄：33.6 mg/kg 体重/日、雌：38.4 mg/kg 体重/日）であると考えられ
19 た。（参照 62、71）

20 （農薬抄録：308～313）

1 III. 食品健康影響評価

2 参照に挙げた資料を用いて農薬「フルベンジアミド」の食品健康影響評価を実施
3 した。なお、今回、ラット急性神経毒性試験、ラット免疫毒性試験、国内作物残留
4 試験（とうもろこし、そば等）、海外作物残留試験（アーモンド及びペカン）等が
5 新たに提出された。

6 ¹⁴C で標識したフルベンジアミドを用いた動物体内運命試験の結果、ラットに単
7 回投与後の血漿中濃度は低用量群で投与 6～12 時間後に、高用量群で投与 12 時間
8 後に最高に達した。投与後 48 時間の吸収率は雄で少なくとも 23.5%、雌で少なく
9 とも 34.1%と推定された。組織内では、投与後 9 時間で吸収部位である消化管（胃、
10 小腸及び大腸）、肝臓、腎臓、副腎及び脂肪等に比較的高濃度に認められた。主な
11 排泄経路は糞及び胆汁であったが、特に糞中への排泄が多かった。尿、糞及び胆汁
12 における化合物の大部分を占めたのは親化合物であった。

13 ¹⁴C で標識したフルベンジアミドを用いた植物体内運命試験の結果、残留放射能
14 はほとんどが散布部位で認められ、その内容としては親化合物が大部を占め、他に
15 主な代謝物として B、C、E 及び H が確認された。

16 野菜、果実、豆類及び茶を用いて、フルベンジアミド、代謝物 B 及び C を分析
17 対象化合物とした作物残留試験が実施された。国内でのフルベンジアミドの最大残
18 留値は、茶（荒茶）の 34.9 mg/kg であった。代謝物 B の最大残留値は、リーフレ
19 タスの 0.20 mg/kg であった。代謝物 C は全データが定量限界未満であった。海外で
20 のフルベンジアミドの最大残留値は、ほうれんそうの 6.72 mg/kg であった。代謝
21 物 B の最大残留値は、マスタードグリーン of 0.04 mg/kg であった。後作物残留試
22 験の結果、いずれの作物でもフルベンジアミド、代謝物 B 及び C ともに定量限界
23 未満であった。

24 各種毒性試験結果から、フルベンジアミド投与による影響は主に肝臓（肝細胞
25 肥大、肝細胞脂肪化等）及び甲状腺（ろ胞上皮細胞肥大等）に認められた。神
26 経毒性、発がん性、繁殖能に対する影響、催奇形性、発達神経毒性及び遺伝毒性は
27 認められなかった。

28 マウス及びラットでは検体投与の影響による甲状腺の病理学的所見が認められ
29 たが、両種の変化は質的に異なり、種差があった。また、甲状腺の変化の原因とし
30 て、肝臓の薬物代謝酵素誘導による間接的影響の他、薬物の直接影響も考えられた。

31 繁殖試験の児動物で観察された眼球腫大の発現には、薬物投与と遺伝的背景（感
32 受性の差）の両者が関与していると考えられた。しかし、発現機序の詳細について
33 は不明であった。

34 各種試験結果から、農産物中の暴露評価対象物質をフルベンジアミド（親化合物
35 のみ）と設定した。

36 各試験における無毒性量等は表 41 に示されている。

37 食品安全委員会農薬専門調査会は、各試験で得られた無毒性量のうち最小値がラ
38 ットを用いた 2 年間発がん性試験の 1.70 mg/kg 体重/日であったことから、これを

1 根拠として、安全係数 100 で除した 0.017 mg/kg 体重/日を一日摂取許容量 (ADI)
2 と設定した。

3

ADI	0.017 mg/kg 体重/日
(ADI 設定根拠資料)	発がん性試験
(動物種)	ラット
(期間)	2 年間
(投与方法)	混餌
(無毒性量)	1.70 mg/kg 体重/日
(安全係数)	100

4

5

6

表 41 各試験における無毒性量及び最小毒性量

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日)	最小毒性量 (mg/kg 体重/日)	備考 ⁵
ラット	90 日間 亜急性 毒性試験	0、20、50、200、2,000、20,000 ppm ----- 雄：0、1.15、2.85、11.4、116、 1,190 雌：0、1.30、3.29、13.1、128、 1,320	雄：11.4 雌：3.29	雄：116 雌：13.1	雄：PLT 増加 雌：小葉周辺性肝細胞脂肪化 等
	1 年間 慢性毒性 試験	0、20、50、2,000、20,000 ppm ----- 雄：0、0.781、1.95、79.3、822 雌：0、0.960、2.40、97.5、998	雄：1.95 雌：2.40	雄：79.3 雌：97.5	雌雄：甲状腺ろ胞上皮細胞肥 大等
	2 年間 発がん性 試験	0、50、1,000、20,000 ppm ----- 雄：0、1.70、33.9、705 雌：0、2.15、43.7、912	雄：1.70 雌：2.15	雄：33.9 雌：43.7	雌雄：小葉周辺性肝細胞脂肪 化等 (発がん性は認められない)
	2 世代 繁殖試験	0、20、50、2,000、20,000 ppm ----- P 雄：0、1.30、3.30、131、1,310 P 雌：0、1.59、3.95、159、1,580 F ₁ 雄：0、1.64、4.05、162、1,640 F ₁ 雌：0、1.84、4.59、176、1,810	親動物及び 児動物 P 雄：3.30 P 雌：3.95 F ₁ 雄：4.05 F ₁ 雌：4.59	親動物及び 児動物 P 雄：131 P 雌：159 F ₁ 雄：162 F ₁ 雌：176	親動物 雌雄：甲状腺ろ胞上皮細胞肥 大等 児動物 雌雄：肝絶対及び比重量増加 等 (繁殖能に対する影響は認め られない)
	1 世代 繁殖試験	0、50、200、2,000、20,000 ppm ----- P 雄：0、3.25、12.9、127、1,290 P 雌：0、3.84、15.0、149、1,490 F ₁ 雄：0、4.05、15.9、160、1,610 F ₁ 雌：0、5.28、21.0、206、2,090	親動物 P 雄：12.9 P 雌：3.84 F ₁ 雄：15.9 F ₁ 雌：5.28 児動物 F ₁ 雄：12.9 F ₁ 雌：15.0	親動物 P 雄：127 P 雌：15.0 F ₁ 雄：160 F ₁ 雌：21.0 児動物 F ₁ 雄：127 F ₁ 雌：149	親動物 雄：包皮分離完了遅延等 雌：腎絶対及び比重量増加等 児動物 雌雄：肝絶対及び比重量増加 等 (繁殖能に対する影響は認め られない)

⁵ 備考に最小毒性量で認められた所見の概要を示す。

	発生毒性試験	0、10、100、1,000	母動物：10 胎児：1,000	母動物：100 胎児：-	母動物：肝絶対及び比重量増加 胎児：毒性所見なし (催奇形性は認められない)
	発達神経毒性試験	0、120、1,200、12,000 ppm ----- 雌：0、9.9、99.5、980	母動物及び 児動物：9.9	母動物及び 児動物：99.5	母動物：小葉中心性肝細胞肥大等 児動物：包皮分離発現日遅延等
マウス	90日間 亜急性 毒性試験	0、50、100、1,000、10,000 ppm ----- 雄：0、6.01、11.9、123、1,210 雌：0、7.13、14.7、145、1,420	雄：11.9 雌：14.7	雄：123 雌：145	雌雄：小葉中心性肝細胞肥大等 (本試験はガイドラインに準拠せず)
	18か月間 発がん性 試験	0、50、1,000、10,000 ppm ----- 雄：0、4.85、94、988 雌：0、4.44、93、937	雄：4.85 雌：4.44	雄：94 雌：93	雌雄：甲状腺ろ胞上皮細胞肥大等 (発がん性は認められない)
ウサギ	発生毒性試験	0、20、100、1,000	母動物：100 胎児：1,000	母動物：1,000 胎児：-	母動物：摂餌量減少等 胎児：毒性所見なし (催奇形性は認められない)
イヌ	90日間 亜急性 毒性試験	0、100、2,000、40,000 ppm ----- 雄：0、2.58、52.7、1,080 雌：0、2.82、59.7、1,140	雄：2.58 雌：2.82	雄：52.7 雌：59.7	雌雄：副腎絶対及び比重量増加等
	1年間 慢性毒性 試験	0、100、1,500、20,000 ppm ----- 雄：0、2.21、35.2、484 雌：0、2.51、37.9、533	雄：2.21 雌：2.51	雄：35.2 雌：37.9	雄：肝比重量増加等 雌：ALP増加等

1 -：最小毒性量は設定できなかった。

2

3

4

1 <別紙 1：代謝物/分解物略称>

略称	化学名
B	N^2 (2-メシル-1,1-ジメチルエチル)- N^4 {4-[1,2,2,2-テトラフルオロ-1-(トリフルオロメチル)エチル]- σ トリル}フタルアミド
C	3-ヒドロキシ- N^2 (2-メシル-1,1-ジメチルエチル)- N^4 {4-[1,2,2,2-テトラフルオロ-1-(トリフルオロメチル)エチル]- σ トリル}フタルアミド
D	3-ヒドロキシ- N^2 (2-メシル-1,1-ジメチルエチル)- N^4 {4-[1-ヒドロキシ-2,2,2-トリフルオロ-1-(トリフルオロメチル)エチル]- σ トリル}フタルアミド
E	3-ヨード- N^2 (2-メシル-1,1-ジメチルエチル)- N^2 {2-(ヒドロキシメチル)-4-[1,2,2,2-テトラフルオロ-1-(トリフルオロメチル)エチル]フェニル}フタルアミド
F	3-ヨード- N^2 (2-メシル-1,1-ジメチルエチル)- N^2 {2-ホルミル-4-[1,2,2,2-テトラフルオロ-1-(トリフルオロメチル)エチル]フェニル}フタルアミド
G	2-ヨード- N^2 (2-メシル-1,1-ジメチルエチル)-6-{4-ヒドロキシ-6-[1,2,2,2-テトラフルオロ-1-(トリフルオロメチル)エチル]-4 <i>H</i> 3,1-ベンゾオキサジン-2-イル}ベンズアミド
H	2-{{3-ヨード-2-{{(2-メシル-1,1-ジメチルエチル)アミノ}カルボニル}フェニル}カルボニル}アミノ}-5-[1,2,2,2-テトラフルオロ-1-(トリフルオロメチル)エチル]安息香酸
M	2-メチル-4-[1,2,2,2-テトラフルオロ-1-(トリフルオロメチル)エチル]オキサニリド酸
P	3-ヨード- N^4 {4-[1,2,2,2-テトラフルオロ-1-(トリフルオロメチル)エチル]- σ トリル}フタルイミド
R	2-[6-(N^2 {2-ヒドロキシメチル-4-[1,2,2,2-テトラフルオロ-1-(トリフルオロメチル)エチル]フェニル}カルバモイル)-2-ヨードフェニルカルボニルアミノ]-3-メシル-2-メチルプロピオン酸

2

1 <別紙2：検査値等略称>

略称	名称
A/G 比	アルブミン/グロブリン比
ai	有効成分量 (active ingredient)
Alb	アルブミン
ALP	アルカリホスファターゼ
ALT	グルタミン酸ピルビン酸トランスアミナーゼ (GPT)
APTT	活性化部分トロンボプラスチン時間
AST	グルタミン酸オキサロ酢酸トランスアミナーゼ (GOT)
AUC	薬物濃度曲線下面積
ChE	コリンエステラーゼ
C _{max}	(血液又は血漿中) 最高濃度
CMC	カルボキシメチルセルロース
FOB	機能観察総合検査
GGT	γ-グルタミルトランスフェラーゼ (γ-グルタミルトランスぺプチターゼ (γ-GTP))
Glob	グロブリン
Glu	グルコース (血糖)
Hb	ヘモグロビン (血色素量)
Ht	ヘマトクリット値
LC ₅₀	半数致死濃度 (50%致死濃度)
LD ₅₀	半数致死量 (50%致死量)
MCH	平均赤血球血色素量
MCV	平均赤血球容積
PHI	最終使用から収穫までの日数
PLT	血小板数
PT	プロトロンビン時間
RBC	赤血球数
TAR	総処理 (投与) 放射能
TBA	総胆汁酸
T.Bil	総ビリルビン
T.Chol	総コレステロール
TG	トリグリセリド
T _{max}	(血液又は血漿中) 最高濃度到達時間
TP	総蛋白質
TRR	総残留放射能
TSH	甲状腺刺激ホルモン
T _{1/2}	消失半減期
T ₃	トリヨードサイロニン
T ₄	サイロキシン
UDPGT	ウリジン二リン酸グルクロニルトランスフェラーゼ

2
3

1 <別紙3: 作物残留試験成績(国内)>

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)					
					フルベンジアミド		代謝物B		代謝物C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
とうもろこし (乾燥子実) 2008年度	2	200WDG	2	1 3 7 14	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01				
とうもろこし (種子) 2008年度	2	200WDG	2	1 3 7 14	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01				
そば (種子) 2009年度	2	190-200WDG	2	7 14 21	3.27 1.68 1.24	2.16 1.35 1.05				
だいず (乾燥子実) 2003年度	2	150-200WDG	3	7 14 21 42-44	0.089 0.077 0.068 0.030	0.051 0.040 0.035 0.018	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006
だいず (乾燥子実) 2009年度	2	153-158.4 ^{SC}	3	7 14 21	0.06 0.05 0.04	0.045 0.040 0.033				
だいず (乾燥子実) 2009年度	2	90 ^{SC} (無人ヘリ による散布)	3	7 14 21	0.09 0.05 0.01	0.063 0.038 0.01*				
あずき (乾燥子実) 2009年度	2	200WDG	2	7 14 21	0.04 0.03 0.02	0.025* 0.020* 0.015*				
ばれいしょ (塊茎) 2007年度	2	200WDG	2	1 3 7	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01				
さといも (塊茎) 2007年	2	200WDG	2	1 3 14	<0.01 0.01 <0.01	<0.01 0.01* <0.01				
かんしょ (塊根) 2007年	2	300WDG	2	1 3 14	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01				
やまのいも (塊茎) 2007年度	2	200WDG	2	1 3 14	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01				
やまのいも (むかご) 2007年度	2	200WDG	2	14	0.70	0.615				
だいこん (葉部) 2002年度	2	150-200WDG	2	7 14 21 28	3.89 1.14 1.03 0.14	2.50 0.82 0.44 0.08*	0.05 0.01 0.01 <0.01	0.03 0.01* 0.01* <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01
だいこん (根部) 2002年度	2	150-200WDG	2	7 14 21 28	0.007 0.007 0.005 <0.005	0.006* 0.006* 0.005* <0.005	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)					
					フルベンジアミド		代謝物B		代謝物C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
はつか だいこん (茎葉) 2007年度	2	100WDG	1	7 14	5.24 0.30	3.50 0.18*				
はつか だいこん (根) 2007年度	2	100WDG	1	7 14	0.02 <0.01	0.02* <0.01				
かぶ (葉部) 2008年度	2	200WDG	2	1 3 7 14	15.3 13.4 10.9 7.37	12.9 10.8 10.0 6.21				
かぶ (根部) 2008年度	2	200WDG	2	1 3 7 14	0.06 0.06 0.04 0.03	0.033 0.04 0.023 0.023				
わさび だいこん (根部) 2009年度	2	150WDG	2	14 21	0.06 0.05	0.045 0.035				
はくさい (茎葉) 2002年度	2	200WDG	3	1 3 7 14 21	1.81 1.36 0.66 0.38 0.15	1.64 1.08 0.54 0.30 0.10	0.02 0.01 0.01 <0.01 <0.01	0.02 0.01* 0.01* <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01
はくさい (茎葉) 2007-2009年 度	2	0.4 g/箱 ^{SC} × 1 + 300WDG	4	1 3 14	1.92 2.10 0.94	1.13 1.59 0.64				
キャベツ (葉球) 2002年度	2	120-200WDG	3	1 3 7 14 21	1.13 1.50 1.50 0.32 0.10	0.67 0.70 0.67 0.13 0.05*	0.01 0.02 0.01 <0.01 <0.01	0.01* 0.01* 0.01* <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01
キャベツ (葉球) 2003年度	2	200WDG	3	1 3 7 14 21	0.32 0.19 0.08 0.03 0.01	0.19 0.09 0.05 0.02* 0.01*	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01
キャベツ (葉球) 2006年度	2	0.4 g/箱 ^{SC} × 1 + 200-300WDG	3	1 3 7	0.50 0.48 0.31	0.40 0.44 0.25				
キャベツ (葉球) 2007年度	2	0.4 g/箱 ^{SC} × 1 + 300WDG	4	1 3 14	0.87 0.88 0.45	0.75 0.66 0.25				
芽キャベツ (脇芽) 2009年度	2	200WDG	3	1 3 7	1.24 1.23 0.72	0.76 0.78 0.42				
こまつな (茎葉) 2007年度	2	200WDG	2	1 3 7 14	17.7 16.3 11.7 3.45	11.6 9.35 7.05 2.09				

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)					
					フルベンジアミド		代謝物B		代謝物C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
チンゲンサイ (茎葉) 2007年度	2	200 ^{WDG}	2	1 3 7 14	2.24 2.90 1.89 1.42	1.43 1.78 1.35 0.88				
カリフラワー (花蕾) 2007年度	2	0.4 g/箱 ^{SC} × 1 + 300 ^{WDG}	3	1 3 7	0.73 0.50 0.33	0.45 1.00 0.18				
ブロッコリー (花蕾) 2006年度 2007年度	2	0.4 g/箱 ^{SC} × 1 + 200-300 ^{WDG}	3	1 3 6-7 14 18-20	1.65 0.92 0.58 0.07 0.03	1.07 0.51 0.33 0.03* 0.02*				
なばな (茎葉部) 2008年度	2	0.4 g/セルト レイ ^{SC} ×1 + 150-208 ^{WDG}	3	1 3 7 14	4.48 2.65 0.75 0.36	4.05 2.57 0.62 0.24				
はなっこりー (花蕾部及び 茎) 2008年度	2	0.4 g/セルト レイ ^{SC} ×1 + 200 ^{WDG}	3	1 3 7 14	1.10 0.99 0.70 0.33	1.04 0.86 0.52 0.23				
みずな (茎葉) 2008年度 2009年度	4	150-200 ^{WDG}	2	1 3 7 14	10.7 9.02 6.41 0.45	6.38 5.68 3.87 0.41				
のざわな (茎葉) 2007年度	2	200 ^{WDG}	2	1 3 7 14	2.86 2.86 2.25 2.02	2.55 2.53 1.80 1.63				
レタス (茎葉) 2002年度	2	200 ^{WDG}	3	1 3 7 14	0.94 0.97 0.63 0.91	0.56 0.49 0.46 0.40	0.01 0.02 0.01 0.02	0.01* 0.01* 0.01* 0.01*	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01
レタス (茎葉) 2003年度	1	200 ^{WDG}	2	1 3 7 14 21	0.76 0.78 0.51 0.30 0.02	0.66 0.51 0.46 0.28 0.02*	0.01 0.01 <0.01 <0.01 <0.01	0.01* 0.01* <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01
レタス (茎葉) 2007年度	2	0.4 g/箱 ^{SC} × 1 + 200 ^{WDG}	3	1 3 7	5.18 6.20 5.44	2.98 3.64 2.61				
リーフレタス (茎葉) 2004年度	2	200-250 ^{WDG}	2	1 3 7 14 21	9.50 7.42 7.26 5.94 3.06	8.48 6.54 6.03 5.28 2.72	0.20 0.15 0.13 0.11 0.05	0.16 0.12 0.11 0.09 0.04	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01
サラダ菜 (茎葉) 2003年度 2004年度	2	80-150 ^{WDG}	2	1 3 7 14	7.17 5.96 4.73 0.65	5.45 4.66 3.70 0.55	0.11 0.10 0.08 0.01	0.09 0.07 0.06 0.01*	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)					
					フルベンジアミド		代謝物B		代謝物C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
ねぎ (茎葉) 2002年度	2	200WDG	3	7	1.13	0.96	0.01	0.01*	<0.01	<0.01
				14	1.01	0.65	0.01	0.01*	<0.01	<0.01
				21	0.72	0.37	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				28	0.25	0.15	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
アスパラガス (若茎) 2007年度	2	300WDG	2	1	0.47	0.37				
				3	0.05	0.04				
				7	0.03	0.02*				
				14	<0.01	<0.01				
にんじん (根部) 2009年度	2	300WDG	2	1	0.06	0.035*				
				3	0.04	0.025*				
				7	0.03	0.020*				
トマト (果実) 2003年度	2	200-300WDG	2	1	0.25	0.178	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				3	0.24	0.158	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				7	0.21	0.148	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
トマト (果実) 2007年度	2	50 g/400 m ³ くん煙	2	1	0.07	0.048				
				3	0.07	0.038				
				7	0.06	0.038				
				14	0.05	0.033				
ミニトマト (果実) 2007年度	2	300WDG	2	1	0.41	0.35				
				3	0.45	0.33				
				7	0.36	0.32				
				14	0.29	0.25				
ピーマン (果実) 2002年度	2	200-250WDG	2	1	1.16	0.71	0.01	0.01*	<0.01	<0.01
				3	0.69	0.51	0.01	0.01*	<0.01	<0.01
				7	0.32	0.26	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
ピーマン (果実) 2008年度	2	50 g/400 m ³ くん煙	2	1	0.25	0.138				
				7	0.07	0.060				
				14	0.03	0.023				
なす (果実) 2006年度	2	200-250WDG	3	1	0.40	0.28				
				3	0.27	0.20				
				7	0.12	0.06				
なす (果実) 2008年度	2	50 g/400 m ³ くん煙	3	1	0.06	0.048				
				7	0.03	0.023				
				14	<0.01	<0.01				
ししとう (果実) 2009年度	2	250-300WDG	2	1	2.09	1.76				
				3	1.36	1.15				
				7	0.66	0.54				
甘長とうがら し (果実) 2009年度	2	211-263WDG	2	1	1.44	1.17				
				3	0.90	0.78				
				7	0.47	0.37				
きゅうり (果実) 2006年度	2	300WDG	3	1	0.22	0.15				
				3	0.14	0.09				
				7	0.05	0.03				
きゅうり (果実) 2008年度	2	50 g/400 m ³ 、77.3 g/618 m ³ くん煙	3	1	0.04	0.02*				
				3	0.04	0.023*				
				7	0.02	0.015*				
すいか (果皮を除く果 実) 2007年度	2	300WDG	2	1	<0.01	<0.01				
				3	<0.01	<0.01				
				7	<0.01	<0.01				

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)					
					フルベンジアミド		代謝物B		代謝物C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
メロン (果実) 2009年度	2	275-281 ^{WDG}	2	1 3 7	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01				
にがうり (果実) 2008年度 2009年度	2	300 ^{WDG}	3	1 3 7	0.90 0.45 0.11	0.51 0.40 0.09				
オクラ (果実) 2009年度	2	250-299 ^{WDG}	2	1 3 7	0.98 0.55 0.11	0.66 0.34 0.08				
しょうが (根茎) 2009年度	2	200 ^{WDG}	2	1 3 7	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01				
さやえんどう (さや) 2008年度	2	0.4 g/セルト レイ ^{SC} ×1 + 200 ^{WDG}	3	1 3 7 14	0.59 0.57 0.42 0.15	0.50 0.51 0.31 0.13				
さやいんげん (さや) 2007年度	2	0.4 g/箱 ^{SC} × 1 + 200 ^{WDG}	3	1 3 7	1.37 1.32 0.75	0.80 0.73 0.58				
えだまめ (さや) 2007年度	2	0.4 g/箱 ^{SC} × 1 + 200 ^{WDG}	3	1 3 7	1.68 1.60 1.00	1.05 1.04 0.75				
えだまめ (さや) 2009年度	2	171-180 ^{SC}	3	1 3 14	2.13 2.08 1.87	1.45 1.36 1.11				
えだまめ (さや) 2010年度	2	160-196.6 ^{WDG}	3	1 3 7	1.56 1.50 1.14	1.35 1.08 0.815				
ヤングコーン (可食部) 2008年度	2	200 ^{WDG}	2	1 3 7 14	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01				
しょくようほ うずき (果実) 2010年度	2	200 ^{WDG}	2	1 3 7	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01				
しそ (葉) 2008年度	2	200-300 ^{WDG}	2	3 ^a 7 ^a 14	35.9 19.9 3.19	27.2 14.2 2.50				
みょうが (花穂) 2008年度 2009年度	2	300 ^{WDG}	2	1 3 7	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01				
温州みかん (果肉) 2008年度	2	350 ^{WDG}	2	1 3 14	0.03 0.03 0.03	0.020* 0.018* 0.015*				

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)					
					フルベンジアミド		代謝物B		代謝物C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
温州みかん (果皮) 2008年度	2	350WDG	2	1 3 14	3.17 3.12 3.12	2.69 2.61 2.64				
なつみかん (果実) 2008年度	2	250WDG	2	1 3 14	0.15 0.18 0.14	0.12 0.14 0.12				
なつみかん (果実) 2010年度	2	300-303SC	2	1 3 7 14	1.27 1.22 0.89 0.75	0.75 0.71 0.60 0.47				
かぼす (果実) 2008年度	1	308WDG	2	1 3 14	0.17 0.22 0.10	0.17 0.22 0.10				
すだち (果実) 2008年度	1	250WDG	2	1 3 14	0.56 0.34 0.29	0.55 0.34 0.28				
りんご (果実) 2002年度	2	200-250WDG	2	7 14 21 45-49	0.410 0.312 0.287 0.185	0.220 0.190 0.198 0.080*	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006
りんご (果実) 2005年度	2	250WDG	2	1 3 7	0.38 0.41 0.36	0.35 0.32 0.29				
りんご (果実) 2009年度	2	203-225SC	2	1 3 7	0.36 0.29 0.28	0.278 0.220 0.220				
りんご (果実) 2009年度	4	180-225SC	2	1	0.35	0.205				
日本なし (果実) 2002年度	2	150-200WDG	2	7 14 21 28	0.250 0.199 0.163 0.155	0.222 0.183 0.141 0.121	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006
日本なし (果実) 2006年度	1	300WDG	2	1 3 7	0.32 0.29 0.31	0.30 0.26 0.26				
西洋なし (果実) 2006年度	1	300WDG	2	1 3 7	0.29 0.26 0.13	0.23 0.24 0.13				
日本なし (果実) 2009年度	2	180SC	2	1 3 7 14	0.21 0.18 0.17 0.15	0.168 0.160 0.128 0.115				
日本なし (果実) 2009年度	2	182.7-225SC	2	1	0.17	0.15				
もも (果肉) 2003年度	2	200-250WDG	2	1 3 7 14	0.012 <0.005 <0.005 <0.005	0.007 <0.005 <0.005 <0.005	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006	<0.006 <0.006 <0.006 <0.006

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)					
					フルベンジアミド		代謝物B		代謝物C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
もも (果皮) 2003年度	2	200-250WDG	2	1	5.25	3.70	0.01*	0.008*	<0.01	<0.008
				3	3.11	2.61	<0.01	<0.008	<0.01	<0.008
				7	3.34	1.79	<0.01	<0.008	<0.01	<0.008
				14	2.12	1.56	<0.01	<0.008	<0.01	<0.008
もも (果肉) 2009年度	2	360 ^{SC} ×1 樹幹散布	3	1	<0.01	<0.01				
				3	<0.01	<0.01				
				7	<0.01	<0.01				
もも (果皮) 2009年度	2	+ 150-200 ^{SC}	3	1	2.91	2.02				
				3	2.81	2.22				
				7	2.23	1.74				
ネクタリン (果実) 2006年度	2	200-250WDG	2	1	0.43	0.35				
				3	0.38	0.26				
				7	0.48	0.31				
				14	0.27	0.19				
ネクタリン (果実) 2009年度	2	360 ^{SC} ×1 樹幹散布 + 180-200 ^{SC}	3	1	0.43	0.29				
				3	0.47	0.31				
				14	0.30	0.195				
すもも (果実) 2007年度	2	400 WDG	2	1	0.85	0.50				
				3	0.39	0.31				
				7	0.68	0.36				
				14	0.57	0.27				
すもも (果実) 2010年度	2	351-360 ^{SC} × 1 樹幹散布 + 180-195 ^{SC}	3	1	0.03	0.025				
				3	0.03	0.020				
				7	0.02	0.015*				
うめ (果実) 2007年度	2	400 WDG	2	3	1.40	1.10				
				7	1.37	1.02				
				14	0.88	0.71				
うめ (果実) 2010年度	2	360 ^{SC} ×1 樹幹散布 + 152-200 ^{SC}	3	1	1.00	0.81				
				3	0.98	0.74				
				7	0.62	0.58				
おうとう (果実) 2006年度	2	250-300 WDG	2	1	0.57	0.48				
				3	0.43	0.43				
				7	0.43	0.42				
				14	0.44	0.38				
おうとう (果実) 2009年度	2	360 ^{SC} ×1 樹幹散布 + 200 ^{SC}	3	1	0.49	0.29				
				3	0.58	0.34				
				14	0.44	0.25				
おうとう (果実) 2009年度	2	360 ^{SC} ×1 樹幹散布 + 210-225 ^{SC}	3	1	1.21	0.76				
いちご (果実) 2003年度	2	200 WDG	2	1	0.83	0.588	<0.01	<0.008	<0.01	<0.008
				3	0.62	0.400	<0.01	<0.008	<0.01	<0.008
				7	0.49	0.288	<0.01	<0.008	<0.01	<0.008

作物名 (分析部位) 実施年度	試験圃 場数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)					
					フルベンジアミド		代謝物B		代謝物C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
いちご (果実) 2006年度	2	50 g/400 m ³ くん煙	2	1	0.20	0.15				
				3	0.19	0.16				
				7	0.13	0.09				
				14	0.06	0.05				
ぶどう (果実) 2006年度	2	250-350 WDG	2	14	0.83	0.63				
				21	0.72	0.44				
ぶどう (果実) 2009年度	2	135 ^{SC}	2	14	1.12	0.57				
				21	1.03	0.63				
				28	0.94	0.56				
ぶどう (果実) 2009年度	2	135 ^{SC}	2	14	0.37	0.33				
かき (果実) 2006年 2007年	2	200-250 WDG	2	7	0.07	0.06				
かき (果実) 2009年度	2	360 ^{SC} ×1 樹幹散布 + 200 ^{SC}	3	7	0.29	0.21				
				14	0.23	0.15				
				21	0.12	0.09				
キウイフルー ツ (果実) 2010年度	2	160-188 ^{SC}	3	7	<0.01	<0.01				
				14	<0.01	<0.01				
				21	<0.01	<0.01				
茶 (荒茶) 2003年度	2	200 WDG	1	7	29.0	16.1	0.10	0.07*	<0.006	<0.006
				10	21.4	14.1	0.06	0.06*	<0.006	<0.006
				14	16.0	10.0	<0.06	<0.06	<0.006	<0.006
				21	2.88	2.19	<0.06	<0.06	<0.006	<0.006
茶 (浸出液) 2003年度	2	200 WDG	1	7	3.38	1.893	<0.031	<0.031	<0.030	<0.030
				10	2.44	1.582	<0.031	<0.031	<0.030	<0.030
				14	1.98	1.185	<0.031	<0.031	<0.030	<0.030
				21	0.288	0.271	<0.031	<0.031	<0.030	<0.030
茶 (荒茶) 2009年度	2	360 ^{SC}	1	7	32.7	24.7				
				14	12.7	8.7				
				21	3.7	2.2				
茶 (荒茶) 2009年度	4	360 ^{SC}	1	7	34.9	21.2				

注) ・散布には、SC：フロアブル剤、WDG：顆粒水和剤を使用した。

・一部に定量限界未満を含むデータの平均を計算する場合は定量限界値を検出したものとして計算し、*印を付した。

・すべてのデータが定量限界未満の場合は定量限界値の平均に<を付して記載した。

・農薬の使用時期 (PHI) が登録又は申請された使用方法から逸脱している場合は、PHI に a を付した。

1
2
3
4
5
6
7
8

1 <別紙4: 作物残留試験成績(海外)> 事務局修正

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)					
					フルベンジアミド		代謝物B		合計	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
とうもろこし (子実+穂軸) 2004年度	1	107-109 ^{SC}	4	1	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	105-108 ^{SC}	4	1	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	104-106 ^{SC}	4	1	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	104-108 ^{SC}	4	2	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	106-107 ^{SC}	4	1	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	105 ^{SC}	4	1	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	106-113 ^{SC}	4	1	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	105-108 ^{SC}	4	1	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	105-108 ^{SC}	4	1	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	104-111 ^{SC}	4	1	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
とうもろこし (子実+穂軸) 2005年度	1	105-106 ^{SC}	4	1	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	105-109 ^{SC}	4	1	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	0.012	<0.010
				3	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
7				0.011	<0.010	<0.010	<0.010	0.014	0.010	
10	0.011	<0.010	<0.010	<0.010	0.013	0.012				
ブロッコリー (花蕾) 2004年度	1	33-34 ^{WDG}	3	1	0.23	0.22	<0.01	<0.01	0.23	0.22
	1	34 ^{WDG}	3	1	0.16	0.16	0.01	<0.01	0.17	0.16
	1	33-34 ^{WDG}	3	1	0.12	0.09	<0.010	<0.010	0.12	0.11
				3	0.12	0.11	<0.010	<0.010	0.12	0.11
7				0.12	0.11	<0.010	<0.010	0.12	0.11	
10	0.07	0.06	<0.010	<0.010	0.07	0.06				
カリフラワー (花蕾) 2004年度	1	33-34 ^{WDG}	3	1	0.01	<0.01	<0.01	<0.01	0.01	<0.01
	1	33-35 ^{WDG}	3	1	0.02	0.01	<0.01	<0.01	0.02	0.02
	1	34-36 ^{WDG}	3	1	0.03	0.02	<0.01	<0.01	0.03	0.03
キャベツ (葉球) 2004年度	1	35 ^{WDG}	3	1	0.18	0.16	<0.01	<0.01	0.18	0.16
	1	33-34 ^{WDG}	3	1	0.25	0.22	<0.01	<0.01	0.25	0.23
	1	34 ^{WDG}	3	1	0.39	0.30	0.02	0.02	0.39	0.30
	1	34 ^{WDG}	3	1	0.12	0.10	<0.01	<0.01	0.12	0.11
	1	33-34 ^{WDG}	3	1	0.25	0.24	<0.01	<0.01	0.25	0.24
	1	33-35 ^{WDG}	3	1	0.30	0.24	<0.014-9 3	<0.014-9 3	0.31	0.24
3	0.03	0.03	<0.013-9 7	<0.013-9 7	0.04	0.03				
7	0.02	0.01	<0.012-9 1	<0.012-9 1	0.02	0.01				
10	0.03	0.02	<0.011-6 2	<0.011-6 2	0.03	0.02				
結球レタス (茎葉) 2004年度	1	51-53 ^{WDG}	5	1	0.12	0.11	<0.01	<0.01	0.12	0.11
	1	50-51 ^{WDG}	5	1	1.20	0.69	<0.01	<0.01	1.16	0.69
	1	50 ^{WDG}	5	1	0.71	0.66	<0.01	<0.01	0.71	0.66
	1	50-51 ^{WDG}	5	1	0.67	0.66	<0.01	<0.01	0.67	0.66
	1	51-52 ^{WDG}	5	1	0.97	0.97	<0.01	<0.01	0.98	0.97
	1	53 ^{WDG}	5	1	0.47	0.36	<0.01	<0.01	0.48	0.37
3	0.43	0.34	<0.01	<0.01	0.43	0.34				
7	0.31	0.28	<0.01	<0.01	0.31	0.28				
10	0.21	0.16	<0.01	<0.01	0.21	0.17				
リーフレタス (茎葉) 2004年度	1	48-53 ^{WDG}	5	1	0.34	0.32	<0.01	<0.01	0.35	0.32
				3	1.03	0.96	<0.01	<0.01	1.03	0.98
				7	0.15	0.10	<0.01	<0.01	0.15	0.11
	10	0.12	0.08	<0.01	<0.01	0.09	0.05			
1	49-51 ^{WDG}	5	1	5.89	4.58	0.02	0.01	5.90	4.59	
1	49-51 ^{WDG}	5	1	1.27	1.07	0.01	<0.01	1.28	1.08	

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)								
					フルベンジアミド		代謝物B		合計				
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値			
	1	50-51 WDG	5	1	1.14	1.00	<0.01	<0.01	1.15	1.00			
	1	50-51 WDG	5	1	1.63	1.60	<0.01	<0.01	1.63	1.61			
	1	50-51 WDG	5	1	4.79	3.30	0.02	0.01	4.80	3.38			
セロリ (茎葉) 2004年度	1	50-51 WDG	5	1	1.20	0.91	<0.01	<0.01	1.21	0.92			
				3	0.65	0.54	<0.01	<0.01	0.65	0.54			
				7	0.91	0.79	0.01	0.01	0.92	0.80			
				10	0.95	0.86	<0.01	<0.01	0.95	0.87			
	1	49-51 WDG	5	1	0.81	0.70	<0.01	<0.01	0.81	0.70			
	1	50-52 WDG	5	1	2.31	1.95	<0.01	<0.01	2.31	1.95			
ほうれんそう (茎葉) 2004年度	1	49-52 WDG	5	1	4.93	4.46	<0.01	<0.01	4.93	4.46			
				3	3.97	3.66	<0.01	<0.01	3.97	3.66			
				7	2.91	2.76	<0.01	<0.01	2.92	2.76			
				10	1.62	1.40	<0.01	<0.01	1.62	1.39			
	1	51 WDG	5	1	3.74	3.60	<0.01	<0.01	3.75	3.62			
	1	51-52 WDG	5	1	6.72	6.34	0.02	0.02	6.73	6.36			
きゅうり (果実) 2004年度	1	53-64 WDG	5	1	0.031	0.025	<0.010	<0.010	0.031	0.026			
				3	0.032	0.020	<0.010	<0.010	0.033	0.021			
				7	0.012	0.010	<0.010	<0.010	0.012	0.010			
				10	0.013	0.012	<0.010	<0.010	0.014	0.013			
	1	52-53 WDG	5	1	0.012	<0.010	<0.010	<0.010	0.012	<0.010			
メロン (果実) 2004年度	1	53 WDG	5	1	0.016	0.012	<0.010	<0.010	0.019	0.015			
				3	0.012	0.012	<0.010	<0.010	0.014	0.014			
				7	0.011	<0.010	<0.010	<0.010	0.013	0.011			
				10	0.010	<0.010	<0.010	<0.010	0.013	0.010			
	1	55-61 WDG	5	1	0.035	0.028	<0.010	<0.010	0.038	0.030			
	1	52 WDG	5	1	0.093	0.090	<0.010	<0.010	0.096	0.094			
メロン (果肉) 2004年度	1	53 WDG	5	1	0.034	0.020	<0.010	<0.010	0.036	0.023			
				1	53-54 WDG	5	1	0.047	0.040	<0.010	<0.010	0.049	0.043
				1	52-53 WDG	5	1	0.066	0.054	<0.010	<0.010	0.067	0.057
				1	52-53 WDG	5	1	0.064	0.052	<0.010	<0.010	0.066	0.054
	1	52-53 WDG	5	1	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010			
かぼちゃ (果実) 2004年度	1	53 WDG	5	1	0.013	<0.010	<0.010	<0.010	0.014	0.011			
				3	0.012	0.010	<0.010	<0.010	0.014	0.013			
				7	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010			
				10	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010			
	1	51-53 WDG	5	1	0.015	0.012	<0.010	<0.010	0.017	0.014			
かぼちゃ (果実) 2004年度	1	50-64 WDG	5	1	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	0.011	<0.010			
				1	53 WDG	5	1	0.011	<0.010	<0.010	<0.010	0.013	0.010
1	52-53 WDG	5	1	0.043	0.038	<0.010	<0.010	0.045	0.040				

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)					
					フルベンジアミド		代謝物B		合計	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
おうとう (果実) 2004年度	1	141-142 ^{SC}	3	3	0.949	0.846	<0.010	<0.010	0.950	0.848
				7	0.966	0.980	<0.010	<0.010	0.997	0.982
				10	0.730	0.656	<0.010	<0.010	0.732	0.658
				14	0.810	0.626	<0.010	<0.010	0.812	0.628
	1	139-142 ^{SC}	3	7	1.003	0.992	<0.010	<0.010	1.01	0.996
	1	140-141 ^{SC}	3	7	0.576	0.526	<0.010	<0.010	0.578	0.527
	1	140-141 ^{SC}	3	7	0.601	0.596	<0.010	<0.010	0.603	0.598
	1	138-140 ^{SC}	3	7	0.894	0.863	<0.010	<0.010	0.896	0.865
	1	141-143 ^{SC}	3	7	0.989	0.981	<0.010	<0.010	0.991	0.983
	1	140-143 ^{SC}	3	7	0.529	0.496	<0.010	<0.010	0.531	0.498
	1	134-142 ^{SC}	3	7	0.633	0.582	<0.010	<0.010	0.635	0.584
	1	137-142 ^{SC}	3	7	0.161	0.158	<0.010	<0.010	0.163	0.160
1	138-145 ^{SC}	3	7	0.250	0.242	<0.010	<0.010	0.252	0.244	
1	140-141 ^{SC}	3	7	0.198	0.170	<0.010	<0.010	0.200	0.172	
1	140-141 ^{SC}	3	7	0.566	0.522	<0.010	<0.010	0.567	0.525	
もも (果実) 2004年度	1	138-140 ^{SC}	3	3	0.248	0.194	<0.010	<0.010	0.249	0.195
				7	0.200	0.174	<0.010	<0.010	0.201	0.176
				10	0.172	0.141	<0.010	<0.010	0.173	0.142
				14	0.202	0.150	<0.010	<0.010	0.203	0.152
	1	141-142 ^{SC}	3	7	0.200	0.154	<0.010	<0.010	0.201	0.156
	1	140-142 ^{SC}	3	7	0.241	0.216	<0.010	<0.010	0.242	0.218
	1	141-142 ^{SC}	3	7	0.230	0.215	<0.010	<0.010	0.231	0.216
	1	140 ^{SC}	3	7	0.199	0.194	<0.010	<0.010	0.200	0.196
	1	140 ^{SC}	3	7	0.199	0.187	<0.010	<0.010	0.201	0.188
	1	140-141 ^{SC}	3	7	0.202	0.196	<0.010	<0.010	0.203	0.198
	1	140-144 ^{SC}	3	7	0.165	0.164	<0.010	<0.010	0.166	0.166
	1	139-141 ^{SC}	3	7	0.302	0.278	<0.010	<0.010	0.303	0.280
	1	138-141 ^{SC}	3	7	0.200	0.198	<0.010	<0.010	0.202	0.199
	1	139-142 ^{SC}	3	7	0.153	0.138	<0.010	<0.010	0.154	0.139
	1	139-140 ^{SC}	3	7	0.221	0.186	<0.010	<0.010	0.222	0.187
	1	140-142 ^{SC}	3	7	0.319	0.296	<0.010	<0.010	0.320	0.297
	1	140-142 ^{SC}	3	7	0.319	0.296	<0.010	<0.010	0.320	0.297
	1	139-142 ^{SC}	3	7	0.345	0.305	<0.010	<0.010	0.346	0.306
1	139-142 ^{SC}	3	7	0.281	0.278	<0.010	<0.010	0.282	0.280	
1	138-140 ^{SC}	3	7	0.394	0.334	<0.010	<0.010	0.395	0.336	
1	140-141 ^{SC}	3	7	0.260	0.214	<0.010	<0.010	0.261	0.216	
1	138-140 ^{SC}	3	7	0.397	0.383	<0.010	<0.010	0.438	0.381	
プラム (果実) 2004年度	1	140 ^{SC}	3	3	0.045	0.032	<0.010	<0.010	0.046	0.033
				7	0.017	0.016	<0.010	<0.010	0.018	0.018
				10	0.020	0.017	<0.010	<0.010	0.021	0.019
				14	0.013	0.010	<0.010	<0.010	0.014	0.012
	1	139 ^{SC}	3	7	0.437	0.380	<0.010	<0.010	0.438	0.381
	1	139-140 ^{SC}	3	7	0.501	0.488	<0.010	<0.010	0.502	0.490
	1	138 ^{SC}	3	7	0.030	0.028	<0.010	<0.010	0.031	0.030
	1	138-144 ^{SC}	3	7	0.032	0.027	<0.010	<0.010	0.033	0.028
	1	139-143 ^{SC}	3	7	0.053	0.048	<0.010	<0.010	0.054	0.050
	1	139-141 ^{SC}	3	7	0.036	0.034	<0.010	<0.010	0.037	0.036
	1	141 ^{SC}	3	7	0.144	0.126	<0.010	<0.010	0.145	0.128
1	137-140 ^{SC}	3	7	0.016	0.014	<0.010	<0.010	0.017	0.015	
1	141-142 ^{SC}	3	7	0.013	0.012	<0.010	<0.010	0.014	0.014	
1	138-143 ^{SC}	3	7	0.091	0.086	<0.010	<0.010	0.092	0.088	
1	139-142 ^{SC}	3	7	0.070	0.060	<0.010	<0.010	0.072	0.061	

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)					
					フルベンジアミド		代謝物B		合計	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
綿実 (子実) 2004年度	1	105-107 ^{SC}	3	10	0.41	0.32	<0.01	<0.01	0.41	0.32
				22	0.21	0.16	<0.01	<0.01	0.22	0.17
				26	0.18	0.14	<0.01	<0.01	0.18	0.14
				35	0.13	0.10	<0.01	<0.01	0.13	0.10
	1	104-105 ^{SC}	3	26	0.19	0.11	<0.01	<0.01	0.19	0.18
	1	104-107 ^{SC}	3	28	0.03	0.02	<0.01	<0.01	0.04	0.02
	1	104-105 ^{SC}	3	26	0.37	0.32	<0.01	<0.01	0.38	0.32
	1	103-107 ^{SC}	3	28	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
1	107-108 ^{SC}	3	27	0.02	0.02	<0.01	<0.01	0.02	0.02	
1	104-105 ^{SC}	3	28	0.25	0.25	<0.01	<0.01	0.26	0.25	
1	104-105 ^{SC}	3	28	0.12	0.12	<0.01	<0.01	0.12	0.12	
1	104-107 ^{SC}	3	28	0.28	0.20	<0.01	<0.01	0.28	0.20	
綿実 (子実) 2005年度	1	105 ^{SC}	3	28	0.11	0.10	<0.01	<0.01	0.11	0.10
	1	104-106 ^{SC}	3	27	1.00	0.88	<0.01	<0.01	1.00	0.89
	1	104-105 ^{SC}	3	28	0.12	0.10	<0.01	<0.01	0.12	0.10
アーモンド (果実) 2004年度	1	140 ^{SC}	3	7	0.050	0.050	<0.010	<0.010	0.052	0.052
				14	0.031	0.022	<0.010	<0.010	0.033	0.024
				21	0.044	0.042	<0.010	<0.010	0.046	0.044
				28	0.043	0.040	<0.010	<0.010	0.045	0.043
	1	138-139 ^{SC}	3	14	0.055	0.048	<0.010	<0.010	0.057	0.050
	1	139-140 ^{SC}	3	14	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	139-140 ^{SC}	3	14	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	0.010	<0.010
	1	139-142 ^{SC}	3	14	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	140-142 ^{SC}	3	14	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	140-141 ^{SC}	3	14	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	140-141 ^{SC}	3	14	0.022	0.020	<0.010	<0.010	0.024	0.022
	1	138-141 ^{SC}	3	14	0.017	0.012	<0.010	<0.010	0.024	0.022
	1	138-141 ^{SC}	3	14	0.023	0.020	<0.010	<0.010	0.025	0.023
	1	138-139 ^{SC}	3	14	0.055	0.048	<0.010	<0.010	0.057	0.050
	1	140 ^{SC}	3	7	0.050	0.050	<0.010	<0.010	0.052	0.052
	1		3	14	0.031	0.022	<0.010	<0.010	0.033	0.024
	1		3	21	0.044	0.042	<0.010	<0.010	0.046	0.044
	1		3	28	0.043	0.040	<0.010	<0.010	0.045	0.043
	1	139-140 ^{SC}	3	14	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	139-140 ^{SC}	3	14	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
1	139-142 ^{SC}	3	14	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	
1	140-142 ^{SC}	3	14	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	
1	140-141 ^{SC}	3	14	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	
1	140-141 ^{SC}	3	14	0.022	0.020	<0.010	<0.010	0.024	0.022	
1	138-141 ^{SC}	3	14	0.017	0.012	<0.010	<0.010	0.019	0.014	
1	138-141 ^{SC}	3	14	0.023	0.020	<0.010	<0.010	0.025	0.023	
ペカン (果実) 2004年度	1	136-137 ^{SC}	3	7	0.012	0.011	<0.010	<0.010	0.014	0.013
				14	0.012	<0.010	<0.010	<0.010	0.013	<0.010
				21	0.012	<0.010	<0.010	<0.010	0.013	0.010
				28	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	139-145 ^{SC}	3	13	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	140-143 ^{SC}	3	13	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	142-143 ^{SC}	3	13	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	136-186 ^{SC}	3	13	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	135-140 ^{SC}	3	14	0.012	<0.010	<0.010	<0.010	0.013	<0.010
1	139-141 ^{SC}	3	14	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	
1	141 ^{SC}	3	14	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	
1	139-140 ^{SC}	3	12	0.028	0.024	<0.010	<0.010	0.029	0.026	
1	138-139 ^{SC}	3	12	0.018	0.016	<0.010	<0.010	0.019	0.018	

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)					
					フルベンジアミド		代謝物B		合計	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
	1	139-145 ^{SC}	3	13	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	140-143 ^{SC}	3	13	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	142-143 ^{SC}	3	13	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	136-186 ^{SC}	3	13	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	136-137 ^{SC}	3	7	0.012	0.011	<0.010	<0.010	0.014	0.013
	1		3	14	0.012	<0.010	<0.010	<0.010	0.013	<0.010
	1		3	21	0.012	<0.010	<0.010	<0.010	0.013	0.010
	1		3	28	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	135-140 ^{SC}	3	14	0.012	<0.010	<0.010	<0.010	0.013	<0.010
	1	139-141 ^{SC}	3	14	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	141 ^{SC}	3	14	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010	<0.010
	1	139-140 ^{SC}	3	12	0.028	0.024	<0.010	<0.010	0.029	0.026
	1	138-139 ^{SC}	3	12	0.018	0.016	<0.010	<0.010	0.019	0.018
	マスタード グリーン (茎葉) 2004年度	1	33-35 ^{WDG}	3	1	2.15	2.13	0.03	0.03	2.19
3					1.81	1.80	0.04	0.04	1.85	1.83
7					1.52	1.34	0.04	0.04	1.56	1.38
9					0.21	0.16	<0.01	<0.01	1.61	1.36
1		34 ^{WDG}	3	1	2.16	2.12	<0.01	<0.01	2.17	2.13
1		34 ^{WDG}	3	1	1.54	1.53	<0.01	<0.01	1.55	1.54
1		34-35 ^{WDG}	3	1	3.01	2.75	<0.01	<0.01	3.02	2.76
1		33 ^{WDG}	3	1	0.76	0.72	<0.01	<0.01	0.77	0.72
1	34 ^{WDG}	3	1	3.15	2.82	0.02	0.01	3.16	2.83	
1	34 ^{WDG}	3	1	1.51	1.32	<0.01	<0.01	1.51	1.33	
1	33-34 ^{WDG}	3	1	1.30	1.28	<0.01	<0.01	1.30	1.28	

注) ・散布には、SC：フロアブル剤、WDG：顆粒水和剤が用いられた。
 ・すべてのデータが定量限界未満の場合は定量限界値の平均に<を付して記載した。

1
2
3
4
5

1 <別紙5：後作物残留試験成績>

前作			作物名 実施年	試験 圃場 数	PHI (日)	残留値(mg/kg)					
作物名 実施年	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)				フルベンジアミド		代謝物B		代謝物C	
						最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
キャベツ 2003年度	600	3	だいこん (葉部) 2003年度	1	111	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
			だいこん (根部) 2003年度	1	111	<0.005	<0.005	<0.006	<0.006	<0.006	<0.006
			レタス (茎葉) 2003年度	1	76	<0.005	<0.005	<0.006	<0.006	<0.006	<0.006

2 注) 散布には顆粒水和剤を使用した。

3

4

1 <別紙6: 推定摂取量>

作物名	残留値 (mg/kg)	国民平均 (体重:53.3 kg)		小児(1~6歳) (体重:15.8 kg)		妊婦 (体重:55.6 kg)		高齢者(65歳以上) (体重:54.2 kg)	
		ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量(μg/ 人/日)
そば	2.16	3.7	7.99	0.8	1.73	1.4	3.02	4.8	10.4
大豆	0.063	56.1	3.53	33.7	2.12	45.5	2.87	58.8	3.70
あずき	0.025	1.4	0.04	0.5	0.01	0.1	0.00	2.7	0.07
さといも	0.01	11.6	0.12	5.7	0.06	7.9	0.08	17.3	0.17
だいこん(葉)	3.50	2.2	7.70	0.5	1.75	0.9	3.15	3.4	11.9
だいこん(根)	0.02	45.0	0.90	18.7	0.38	28.7	0.58	58.5	1.18
かぶ(葉)	12.9	0.5	6.45	0.1	1.29	0.3	3.87	1.1	14.2
かぶ(根)	0.04	2.6	0.10	0.7	0.03	0.7	0.03	4.2	0.17
西洋ワサビ	0.045	0.1	0.00	0.1	0.00	0.1	0.00	0.1	0.00
はくさい	1.64	29.4	48.2	10.3	16.9	21.9	35.9	31.7	52.0
キャベツ	0.78	22.8	17.8	9.8	7.64	22.9	17.9	19.9	15.5
こまつな	11.6	4.3	49.9	2	23.2	1.6	18.6	5.9	68.4
きょうな	6.38	0.3	1.91	0.1	0.64	0.1	0.64	0.3	1.91
チンゲンサイ	1.78	1.4	2.49	0.3	0.53	1	1.78	1.9	3.38
カリフラワー	1	0.4	0.40	0.1	0.10	0.1	0.10	0.4	0.40
ブロッコリー	1.07	4.5	4.82	2.8	3.00	4.7	5.03	4.1	4.39
その他のアブラ ナ科野菜	4.05	2.1	8.51	0.3	1.22	0.2	0.81	3.1	12.56
レタス	8.48	6.1	51.7	2.5	21.2	6.4	54.3	4.2	35.6
ねぎ	0.96	11.3	10.9	4.5	4.32	8.2	7.87	13.5	13.0
アスパラガス	0.37	0.9	0.33	0.3	0.11	0.4	0.15	0.7	0.26
にんじん	0.035	24.6	0.86	16.3	0.57	25.1	0.88	22.3	0.78
トマト	0.35	24.3	4.37	16.9	3.04	24.5	4.41	18.9	3.40
ピーマン	0.71	4.4	3.12	2.0	1.42	1.9	1.35	3.7	2.63
ナス	0.28	4.0	1.12	0.9	0.25	3.3	0.92	5.7	1.60
その他のなす科 野菜	1.76	0.2	0.35	0.1	0.18	0.1	0.18	0.3	0.53
きゅうり	0.15	16.3	2.45	8.2	1.23	10.1	1.52	16.6	2.49
その他のうり科 野菜	0.51	0.5	0.26	0.1	0.05	2.3	1.17	0.7	0.36
おくら	0.66	0.3	0.20	0.2	0.13	0.2	0.13	0.3	0.20
未成熟えんどう	0.51	0.6	0.31	0.2	0.10	0.7	0.36	0.6	0.31
未成熟いんげん	0.8	1.9	1.52	1.2	0.96	1.8	1.44	1.8	1.44

作物名	残留値 (mg/kg)	国民平均 (体重:53.3 kg)		小児 (1~6歳) (体重:15.8 kg)		妊婦 (体重:55.6 kg)		高齢者 (65歳以上) (体重:54.2 kg)	
		ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量(μg/ 人/日)
えだまめ	1.45	0.1	0.15	0.1	0.15	0.1	0.15	0.1	0.15
その他の野菜	0.615	12.6	7.75	9.7	5.97	9.6	5.90	12.2	7.50
みかん	0.02	41.6	0.83	35.4	0.71	45.8	0.92	42.6	0.85
なつみかん	0.75	0.1	0.08	0.1	0.08	0.1	0.08	0.1	0.08
その他のかんき つ	0.55	0.4	0.22	0.1	0.06	0.1	0.06	0.6	0.33
りんご	0.35	35.3	12.4	36.2	12.7	30.0	10.5	35.6	12.5
日本なし	0.30	5.1	1.53	4.4	1.32	5.3	1.59	5.1	1.53
西洋なし	0.24	0.1	0.02	0.1	0.02	0.1	0.02	0.1	0.02
もも	0.01	0.5	0.01	0.7	0.01	4.0	0.04	0.1	0.00
ネクタリン	0.35	0.1	0.04	0.1	0.04	0.1	0.04	0.1	0.04
スモモ	0.50	0.2	0.1	0.1	0.05	1.4	0.7	0.2	0.1
ウメ	1.1	1.1	1.21	0.3	0.33	1.4	1.54	1.6	1.76
おうとう	0.76	0.1	0.08	0.1	0.08	0.1	0.08	0.1	0.08
イチゴ	0.59	0.3	0.18	0.4	0.24	0.1	0.06	0.1	0.06
ブドウ	0.63	5.8	3.65	4.4	2.77	1.6	1.01	3.8	2.39
かき	0.21	31.4	6.59	8	1.68	21.5	4.52	49.6	10.4
茶	24.7	3	74.1	1.4	34.6	3.5	86.5	4.3	106
その他のスパイ ス	2.69	0.1	0.27	0.1	0.27	0.1	0.27	0.1	0.27
その他のハーブ	2.5	0.1	0.25	0.1	0.25	0.1	0.25	0.1	0.25
合計			352		158		287		411

注) ・残留値は、申請されている使用時期・回数フルベンジアミドの平均残留値のうち最大のものを
を用いた(参照 別紙3)。

・ff:平成10年~12年の国民栄養調査(参照56~58)の結果に基づく農産物摂取量(g/人/日)

・摂取量:残留値及び農産物摂取量から求めたフルベンジアミドの推定摂取量(μg/人/日)

・レタスにはリーフレタスの値、だいこんにははつかだいこんの値、西洋わさびにはわさびだい
こんの値、キャベツには芽キャベツの値、その他のあぶらな科野菜にはなばなの値、きょうな
にはみずなの値、トマトにはミニトマトの値、その他のなす科野菜にはししとうの値、その他
のうり科野菜にはにがうりの値、その他のかんきつにはすだちの値、その他のハーブにはしそ
の値及びその他のスパイスには温州みかん(果皮)の値を用いた。

・とうもろこし、ばれいしょ、かんしょ、やまのいも(塊茎)、すいか、メロン、しょうが、ヤ
ングコーン、しょくようほうずき、みょうが及びキウイフルーツは全データが定量限界未満で
あったため、摂取量の計算はしていない。

- 1 <参照>
- 2 1 農薬抄録フルベンジアミド（殺虫剤）（平成 18 年 2 月 28 日改訂）：日本農薬株式会社、
- 3 2006 年
- 4 2 ラットにおける単回経口投与代謝試験（GLP 対応）：日本農薬（株）、2004 年、未公表
- 5 3 ラットにおける反復経口投与代謝試験（GLP 対応）：日本農薬（株）、2004 年、未公表
- 6 4 ラットにおける胆汁中排泄試験（GLP 対応）：日本農薬（株）、2004 年、未公表
- 7 5 りんごにおける代謝試験（GLP 対応）：PTRL West,Inc.（米国）、2002 年、未公表
- 8 6 キャベツにおける代謝試験（GLP 対応）：日本農薬（株）、2002 年、未公表
- 9 7 トマトにおける代謝試験（GLP 対応）：日本農薬（株）、2002 年、未公表
- 10 8 好氣的土壌代謝試験（GLP 対応）：日本農薬（株）、2003 年、未公表
- 11 9 土壌表面光分解試験（GLP 対応）：PTRL West,Inc.（米国）、2004 年、未公表
- 12 10 土壌吸着性（GLP 対応）：日本農薬（株）、2003 年、未公表
- 13 11 加水分解試験/加水分解運命試験（GLP 対応）：日本農薬（株）、2001 年、未公表
- 14 12 水中光分解試験/水中光分解運命試験（GLP 対応）：日本農薬（株）、2002 年、未公表
- 15 13 フルベンジアミドの土壌残留試験成績：日本農薬（株）、2004 年、未公表
- 16 14 フルベンジアミドの作物残留試験成績①：日本農薬（株）、2004 年、未公表
- 17 15 フルベンジアミドの作物残留試験成績②：日本農薬（株）、2004 年、未公表
- 18 16 フルベンジアミドの後作物残留試験成績：日本農薬（株）、2004 年、未公表
- 19 17 フルベンジアミドにおける薬理試験（GLP 対応）：（株）環境バイリス研究所、2002 年、
- 20 未公表
- 21 18 ラットにおける急性経口毒性試験（GLP 対応）：日本農薬（株）、2003 年、未公表
- 22 19 ラットにおける急性経皮毒性試験（GLP 対応）：日本農薬（株）、2003 年、未公表
- 23 20 ラットにおける急性吸入毒性試験（GLP 対応）：日本農薬（株）、2004 年、未公表
- 24 21 代謝物 A-1(NNI-0001-脱ヨウ素：B)のラットにおける急性経口毒性試験（GLP 対応）：日
- 25 本農薬（株）、2004 年、未公表
- 26 22 代謝物 A-2(NNI-0001-3-ヒドロキシ：C)のラットにおける急性経口毒性試験（GLP 対応）：
- 27 日本農薬（株）、2004 年、未公表
- 28 23 ウサギを用いた皮膚刺激性試験（GLP 対応）：日本農薬（株）、2004 年、未公表
- 29 24 ウサギを用いた眼刺激性試験（GLP 対応）：日本農薬（株）、2004 年、未公表
- 30 25 モルモットを用いた皮膚感作性試験（GLP 対応）：日本農薬（株）、2004 年、未公表
- 31 26 ラットを用いた飼料混入投与による 90 日間反復経口投与毒性試験（GLP 対応）：（財）
- 32 残留農薬研究所、2003 年、未公表
- 33 27 イヌを用いた飼料混入投与による 90 日間反復経口投与毒性試験（GLP 対応）：（財）残
- 34 留農薬研究所、2003 年、未公表
- 35 28 ラットを用いた飼料混入投与による 1 年間反復経口投与毒性試験（GLP 対応）：（財）残
- 36 留農薬研究所、2004 年、未公表
- 37 29 イヌを用いた 1 年間反復経口投与毒性試験（GLP 対応）：（財）残留農薬研究所、2004
- 38 年、未公表

- 1 30 ラットを用いた発がん性試験（GLP 対応）：（財）残留農薬研究所、2004 年、未公表
- 2 31 マウスを用いた発がん性試験（GLP 対応）：（財）残留農薬研究所、2004 年、未公表
- 3 32 繁殖毒性（GLP 対応）：（財）残留農薬研究所、2004 年、未公表
- 4 33 繁殖毒性（追加一世代試験）（GLP 対応）：（財）残留農薬研究所、2004 年、未公表
- 5 34 ラットにおける催奇形性試験（GLP 対応）：（財）残留農薬研究所、2003 年、未公表
- 6 35 ウサギにおける催奇形性試験（GLP 対応）：（財）残留農薬研究所、2002 年、未公表
- 7 36 細菌を用いる復帰突然変異試験（GLP 対応）：日本農薬（株）、2003 年、未公表
- 8 37 ハムスターの CHL 細胞を用いた *in vitro* 染色体異常試験（GLP 対応）：日本農薬（株）、
- 9 2004 年、未公表
- 10 38 マウスを用いた小核試験（GLP 対応）：日本農薬（株）、2003 年、未公表
- 11 39 代謝物 A-1(NNI-0001-脱ヨウ素：B)の細菌を用いる復帰突然変異試験（GLP 対応）：日本
- 12 農薬（株）、2004 年、未公表
- 13 40 代謝物 A-2(NNI-0001-3-ヒドロキシ：C)の細菌を用いる復帰突然変異試験（GLP 対応）：
- 14 日本農薬（株）、2004 年、未公表
- 15 41 食品健康影響評価について（平成 17 年 3 月 31 日付け厚生労働省発食安第 0331001 号）
- 16 42 フルベンジアミドの食品健康影響評価に係る追加提出資料：日本農薬株式会社、2005 年、
- 17 未公表
- 18 43 フルベンジアミドの食品健康影響評価に係る追加提出資料：日本農薬株式会社、2006 年、
- 19 未公表
- 20 44 食品健康影響評価の結果の通知について（平成 18 年 10 月 26 日付け府食第 846 号）
- 21 45 食品、添加物等の規格基準（昭和 34 年厚生省告示第 370 号）の一部を改正する件（平成
- 22 19 年 2 月 27 日付け厚生労働省告示第 26 号）
- 23 46 食品健康影響評価について（平成 19 年 11 月 9 日付け厚生労働省発食安第 1109009 号）
- 24 47 農薬抄録フルベンジアミド（殺虫剤）（平成 19 年 10 月 10 日改訂）：日本農薬株式会社、
- 25 2007 年、一部公表
- 26 48 フルベンジアミドの作物残留性試験成績：日本農薬（株）、2007 年、未公表
- 27 49 食品健康影響評価の結果の通知について（平成 20 年 1 月 31 日付け府食第 109 号）
- 28 50 食品健康影響評価について（平成 21 年 10 月 27 日付け厚生労働省発食安 1027 第 4 号）
- 29 51 農薬抄録フルベンジアミド（殺虫剤）（平成 21 年 8 月 4 日改訂）：日本農薬株式会社、
- 30 2009 年、一部公表
- 31 52 フルベンジアミド作物残留試験成績：日本農薬株式会社、2009 年、未公表
- 32 53 フルベンジアミド海外作物残留試験成績：日本農薬株式会社、2009 年、未公表
- 33 54 フルベンジアミド インポートトレランス設定に関する資料：日本農薬株式会社、2009
- 34 年、未公表
- 35 55 フルベンジアミドの追加毒性試験成績：日本農薬株式会社、2009 年、未公表
- 36 56 国民栄養の現状－平成 10 年国民栄養調査結果－：健康・栄養情報研究会編、2000 年
- 37 57 国民栄養の現状－平成 11 年国民栄養調査結果－：健康・栄養情報研究会編、2001 年
- 38 58 国民栄養の現状－平成 12 年国民栄養調査結果－：健康・栄養情報研究会編、2002 年

- 1 59 食品健康影響評価の結果の通知について（平成 22 年 7 月 22 日付け府食第 566 号）
- 2 60 食品、添加物等の規格基準（昭和 34 年厚生省告示第 370 号）の一部を改正する件（平成
- 3 23 年 7 月 19 日付け厚生労働省告示第 241 号）
- 4 61 食品健康影響評価について（平成 24 年 1 月 19 日付け厚生労働省発食安 0119 第 5 号）
- 5 62 農薬抄録フルベンジアミド（殺虫剤）（平成 23 年 10 月 17 日改訂）：日本農薬株式会社、
- 6 2011 年、一部公表予定
- 7 63 水稻の代謝試験（GLP 対応）：日本農薬株式会社、2004 年、未公表
- 8 64 トウモロコシの代謝試験（GLP 対応）：Bayer CropScience、2005 年、未公表
- 9 65 フルベンジアミド作物残留試験成績：日本農薬株式会社、2010 年、未公表
- 10 66 フルベンジアミド海外作物残留試験成績：Bayer CropScience、未公表
- 11 67 ラットを用いた急性神経毒性試験（GLP 対応）：Bayer CropScience LP、2003 年、未
- 12 公表
- 13 68 V79 細胞を用いた遺伝子突然変異試験（GLP 対応）：Bayer HealthCare AG、2003 年、
- 14 未公表
- 15 69 マウスを用いた小核試験（GLP 対応）：Bayer HealthCare AG、2005 年、未公表
- 16 70 マウスの周産期投与による眼発達への影響に関する試験（GLP 対応）：Bayer HealthCare
- 17 AG、2006 年、未公表
- 18 71 ラットを用いた免疫毒性試験（GLP 対応）：Bayer HealthCare AG、2005 年、未公表